イビソク京都市内遺跡調査報告　第17輯

平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡

－東九条南山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書－

株式会社 イ ビ ソ ク

平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡　－東九条南山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書－　株式会社 イ ビ ソ ク

イビソク京都市内遺跡調査報告　第17輯

平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡

－東九条南山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書－

株式会社 イ ビ ソ ク

例　言

1．本書は京都府京都市南区東九条南山王町５番１に所在する平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、文化財保護法第93条第１項に基づき平成28年10月18日付けで届出された土木工事に伴い、平成28年10月26日・10月27日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。［京都市番号16H247］

3．本調査は、ホテル新築工事に伴う事前調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。

4．発掘調査は、平成29年２月27日から平成29年４月21日にかけて実施した。

5．発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、及び京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。

6．発掘調査は次の体制で行った。

　調 査 主 体　株式会社イビソク

　調　査　員　兼康保明・熊谷洋一

　調査補助員　濵村友美

7．本報告書の編集及び執筆は、第１～４章は濵村が行い、これに熊谷が加筆・修正を行った。第６章は熊谷が行った。また第５章は森将志、小林克也（パレオ・ラボ）が行った。全体の監修を兼康指導のもと、熊谷が行った。

8．本報告書では次に示した地図を調整・使用している。

京都市地形図（１：2500）「京都駅」「梅小路」京都市都市計画局発行

9．本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。

10．本報告書で示す方位・座標は、国土座標第Ⅵ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）に基づく数値である。

11．本報告書に掲載した写真は、遺構写真を熊谷、濵村が、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。

12．報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。

山中章（三重大学名誉教授）（敬称略）

13．出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

凡　例

1．遺構・遺物写真の縮尺は任意である。

2．遺構番号は各調査面の番号を頭一桁に付し、検出順に通し番号を後ろ３桁に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。

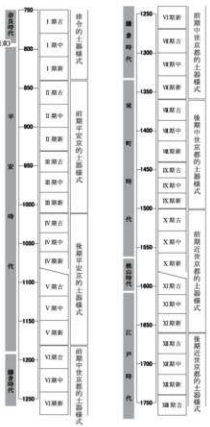
3．出土遺構の計測値は、小数点以下第２位まで表記し、現存値には（　）を付けて表現する。

4．表で示した出土遺物の計測値は、残存値に［　］、復元値に（　）を付けて表現する。

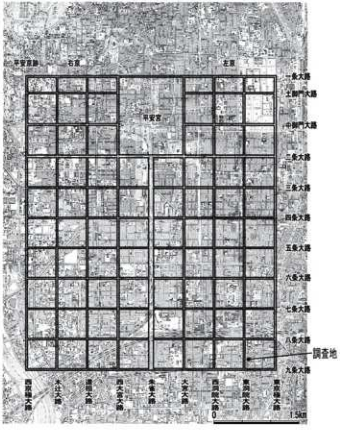
5．遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版でそれぞれ対応している。

6．本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。

7．出土遺物の年代は、小森俊寛（2005）の編年（第１表）を基調とした。



第１表　平安京土器型式―年代対応表



第１図　平安京復元図と調査地の位置

目　次

例言

凡例

目次

第１章　調査の経緯……1

　第１節　調査に至る経緯

　第２節　調査の経過

　第３節　調査の方法

第２章　位置と環境……3

第３章　遺　構……7

　第１節　基本層序

　第２節　遺構の概要

　第３節　第１面の遺構

　第４節　第２面の遺構

第４章　遺　物……22

　第１節　遺物の概要

　第２節　第１面の遺物

　第３節　第２面の遺物

第５章　自然科学分析……29

　第１節　プラント・オパール分析

　第２節　平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡出土木製品の樹種同定

第６章　まとめ……34

　第１節　烏丸町遺跡～平安時代中期まで

　第２節　第Ⅰ期

　第３節　第Ⅱ期

　第４節　結び

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　平安京復元図と調査地の位置
第２図　調査地位置図（縮尺1/2,500）…… 1
第３図　調査前風景…… 2
第４図　調査区配置図（縮尺１/500）…… 2
第５図　周辺調査位置図（縮尺１/5,000）…… 3
第６図　調査区区分図…… 7
第７図　調査区北壁・東壁・西壁断面図（縮尺１/80）…… 8
第８図　調査区南壁断面図（縮尺１/80）…… 9
第９図　第１面全体図（縮尺１/100）……10
第10図　第２面全体図　（縮尺１/100）……11
第11図　第１面　土坑1006完掘状況……12
第12図　第１面　土坑1032・1049（縮尺1/20）……12
第13図　第１面　溝1087・1088・1091～1094（縮尺1/100）……13
第14図　第２面　井戸2013（縮尺1/40）……14
第15図　第２面　土坑2073遺物出土状況……15
第16図　第２面　溝2081（縮尺1/50、1/100）……16
第17図　第２面　土坑2088（縮尺1/50）……17
第18図　第２面　井戸2099（縮尺1/50）……17
第19図　第２面　築地基底部2100　礫検出状況平面図（縮尺1/100）……19
第20図　第２面　築地基底部2100　土層断面図及び完掘平面図（縮尺1/50、1/100）……19
第21図　調査区遺構断面図　ベルト１～３（縮尺1/50）……20
第22図　第２面　土取り坑（縮尺1/60）……21
第23図　第１面　出土遺物実測図（縮尺1/4）……24
第24図　第２面　出土遺物実測図１（縮尺1/4）……26
第25図　第２面　出土遺物実測図２（縮尺1/4）……28
第26図　平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡における植物珪酸体分布図……30
第27図　平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡から産出した植物珪酸体……31
第28図　出土木製品の光学顕微鏡写真……33
第29図　昭和53年度調査と第Ⅰ期を中心として比較（縮尺1/300）……36

表　目　次

第１表　平安京土器型式一年代対応表
第２表　周辺調査地一覧……5
第３表　遺構概要表……12
第４表　遺物概要表……22
第５表　分析試料一覧……29
第６表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数……29
第７表　樹種同定結果……32
第８表　出土遺物観察表……37

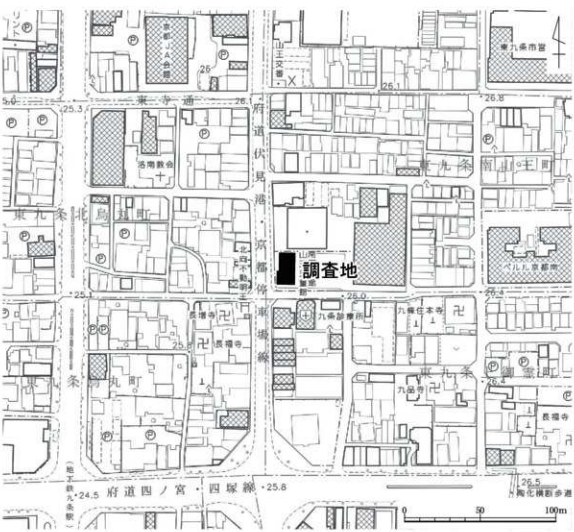
図 版 目 次

図版一　第１面完掘（北から）
溝状遺構完掘状況（南から）
溝1088断面（南から）
図版二　溝1088遺物出土状況１（南から）
溝1088遺物出土状況２（南から）
土坑1049遺物出土状況（東から）
図版三　第２面完掘（北から）
築地基底部2100検出状況（北から）
築地基底部2100断面（南から）
図版四　溝2081完掘（東から）
溝2081断面（東から）
土坑2073遺物出土状況（北から）
土坑2088断面（東から）
図版五　井戸2013横桟検出状況（南から）
井戸2013曲物検出状況（南から）
図版六　出土遺物１
図版七　出土遺物２

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

調査はホテル新築工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都府京都市南区東九条南山王町５番１に所在する、平安京左京九条四坊三町跡（遺跡番号１）・烏丸町遺跡（同759）である。当該地においてホテルが建設されることになり、建設者は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成28年10月18日付で文化財保護法第93条第１項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成28年10月26・27日に試掘調査を実施したところ、当該地に平安京跡の遺構が残存していることが確認された（受付番号16H247）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法第92条に基づき京都府教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成29年２月27日より調査を開始した。



第２図　調査地位置図（縮尺 1/2,500）

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成29年２月27日から平成29年４月21日まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定した（第４図）。調査面積は252㎡である。調査は、バックホウによる近代以降の堆積層の除去作業と並行して、撹乱の除去を行った。機械掘削後は、遺構検出面を精査して、遺構検出を行った。

第１面は、平安時代末期～鎌倉時代前期を中心とする遺構の調査を行い、第２面は、平安時代後期～末期の遺構を確認した。

第２面調査終了後に、調査区北端、南端にトレンチを設定し掘削した。その結果、第２面より下層には、遺構・遺物が包含されていないことを確認した。それぞれの遺構面の検出時と完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

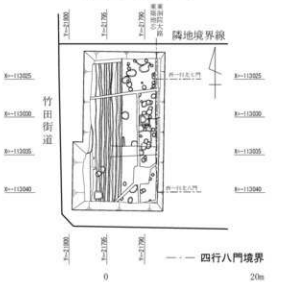
第３節　調査の方法

試掘データに基づき第１面まで重機掘削を行った。

遺構検出と並行して、遺構配置図を作成し、遺構の配置や重複する遺構の新旧関係等の把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図等を基本的に手実測で行い、平面図はトータルステーションを用いて行った。また、土層断面、微細図等は、必要に応じて写真測量及び３Ｄレーザー計測を行った。遺構の位置関係と遺物の取り上げのため座標に合わせて東西方向に西から１から４、南北方向に北からＡからＦの４ｍグリッドを設定した。調査区を南北に縦断する溝状遺構が複数並走したため、南北壁面のみによる観察では不十分と判断し、ほぼ等間隔に東西方向のベルトを設置した。遺構番号については、各面の番号を最初に付加し、その後に001からの通し番号を割り当てた。

遺構実測図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行った（第10図）。編集に伴って各遺構を検討し、遺構の性格付けを行った。

第３図　調査前風景



第４図　調査区配置図（縮尺1/500）

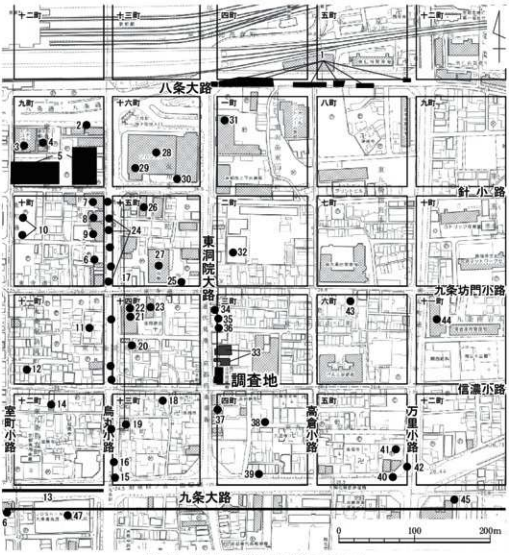
出土した遺物は、洗浄、注記、接合の後にランク分けを行い、実測対象検討遺物（Ｂランク）を抽出した。報告書掲載遺物（Ａランク）は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物（Ｃランク）は遺構番号順にコンテナに収納した。

第２章　位置と環境

調査地は、ＪＲ京都駅の南東側約500m、鴨川から約550m西側に立地する。現在の九条通から竹田街道を北へ上った東側に位置する。鴨川の氾濫によって形成された扇状地が遺構の基盤層を形成している。調査地周辺の標高は約26.0mである。

当地の平安時代以前の遺跡として、弥生時代から古墳時代の集落跡とされている烏丸町遺跡があり、周辺調査において、弥生時代及び古墳時代の遺物包含層や流路が検出されている。また、古墳時代の住居跡が検出されている。

平安京の条坊では、左京九条四坊三町に相当し、北を九条坊門小路、南を信濃小路、東を高倉小路、西を東洞院大路に囲まれた区画の南西に位置する。四行八門の区割りでは、西一行北七門・八門にあたる。当区のすぐ北側において、昭和53年度に発掘調査が行われている[1]。その結果、平安時代後期の東洞院大路の東側溝・建物・井戸、室町時代の井戸・土坑が検出された。今回の調査地は、昭和53年度調査において発見された東洞院大路東側溝の続き及び築地の検出が期待される地点であった。



第５図　周辺調査位置図（縮尺 1/5,000）

以下、九条四坊各町に関する文献史料の記録及び周辺調査を時代順に概説する。

平安時代前期

九条四坊内においては、文献史料が少なく、建物や居住者について不明な部分が多い。周辺では、三坊三町に「施薬院」が所在したとされる（九条家本『延喜式』付図）。これは、貧しい人々や病人のための官立の生活医療保護施設であり、同坊十町は「施薬院御倉」の敷地であったとされる。

発掘調査の結果も、当該期の遺構・遺物は検出されず史料を裏付ける。特に、五条大路付近から南側、西洞院大路から東側の範囲では、街路であるべき箇所から流路を検出する例が多く挙げられる。また、同範囲から当該期の大路・小路の路面や側溝が全く見つかっていない。このことから、現在では、平安京南東部においては、条坊制が施行されていなかったと判断されている[2]。

平安時代中期

前期に引き続き、記載は少ないが、三坊六町において右大臣藤原師輔(908－960)の「九条殿」が存在したとされる（『拾芥抄』東京図)。『平安京提要』[3]では、師輔の祖父、藤原基経(836－891)の「九条殿」が伝領された可能性が指摘されている。

発掘調査の結果は、前期に比べると路面及び側溝が増加する。特に、五条大路から七条大路の間、西洞院大路から東側の範囲では、前期で見られた流路が埋没し、路面・側溝が敷設される例が見られる。しかし、依然として七条大路以南、西洞院大路以東の範囲からは、流路が散見され、街路に関する遺構は見当たらない。

平安時代後期

この時期から、四坊内に関する文献史料が増加する。『拾芥抄』によれば、一町には、権中納言藤原長実(1075－1133)が創建したとされる「弘誓院」が、四町には民部卿兼権中納言藤原顕頼(1094－1148)の「九条亭」が存在したとされる。五・六町は、崇徳天皇中宮である皇嘉門院聖子(1122－1182)御所の「九条殿」と推定される(『平安京提要』)。12世紀後半、八町と八条四坊五町は太政大臣藤原実行(1080－1162)の邸宅であったとされる(『拾芥抄』東京図)。十一町は、藤原頼輔(1112－1186)の「九条邸(北家)」であった可能性が示唆され、その後建久末年頃(1199年頃)から藤原定家(1162～1241)が居住したという説[4]もあるが、実態は不明である。十二町には、藤原兼実(1149～1207)の本邸「九条第」が存在したと推定される(『平安京提要』)。『中古京師内外地図』は、「九条河原口」と称される地に所在した、平盛国(1113－1186)の邸宅を十三町に比定している。

以上のように、文献史料からは当該期の情報が多く読み取れる。一方で、これらの史実を裏付ける発掘調査の成果が、今後期待される。当調査地には、平安時代を通じて、建物や居住者は知られていないが、平安時代後期に入ってから急激に区画整備が行われたと考えられている。

中世以降

鎌倉時代後期、三町には「興善院」という建物が存在したとされる(京都大学所蔵文書『昭慶門院御領目録』)。他町においても、平安時代後期から引き続き、建物が伝領する例もみられ、発掘調査でも当該期の遺構・遺物は散見される。しかし、全体的には減少傾向にある。これは、

この付近が農村化したためと考えられる。近世に入ると、当地域は東九条村と呼ばれ蔬菜等の栽培地であった(『雍州府史』)。同時に、鴨川の氾濫層も多数検出されている。

註

（1）東九条南山王町遺跡（『史料京都の歴史 第2巻 考古』京都市編、平凡社、1983年）

（2）山本雅和「平安京の街路と宅地」（『平安京の住まい』京都大学学術出版会、2007年）

（3）『平安京提要』古代学協会・古代学研究所編、角川書店、1994年

（4）加納重文「明月記の邸第」（『平安京の邸第』望稜舎、1987年）

第２表　周辺調査地一覧

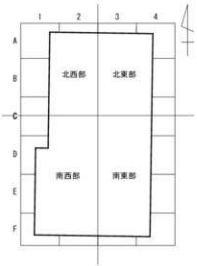
条坊		番号	調査	概要	文献
四九条 五四町・		1	発掘	平安末～室町の東洞院大路・東側溝、築地内溝、八条大路北側溝	『平安京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-20[財]京都市埋蔵文化財研究所、2007年
九条二坊	九町	2	立会	平安後～末期の落ち込み、鎌倉～江戸時代の瀧敷包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度』(京都市文化観光局、1995年)
		3	立会	平安時代中期の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』(京都市文化観光局、1991年)
		4	立会	鎌倉末期・室町時代初期の瀧敷包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成14年度』(京都市文化市民局、2003年)
			立会	鎌倉時代前期、室町時代前・中・後期の瀧敷包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』(京都市文化市民局、1995年)
		5	発掘	平安時代後期～鎌倉時代前期の八条院領周辺の館に付属する物流拠点もしくは倉庫	『平安京左京八条三坊九町・烏丸町遺跡発掘調査　現地説明会資料』(公益財団法人 元興寺文化財研究所、2017年)
	十町	6	立会	鎌倉時代の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』(京都市文化観光局、1986年)
		7	試掘	室町時代前期の土坑墓・土坑・南北溝・柱穴	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』(京都市文化市民局、2000年)
		8	立会	平安時代中期の瀧敷包含層、鎌倉時代前～後期の瀧敷包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成16年度』(京都市文化市民局、2005年)
		9	発掘	平安時代～中期の建物・池・護・土坑、鎌倉～室町時代の建物・梅井戸・土坑	『平安京左京八条三坊十町』(古代文化調査会、2006年)
		10	発掘	平安時代中期・後期の池跡、平安時代末期～鎌倉時代の建物群	『平安京左京八条三坊十町跡・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-15[財]京都市埋蔵文化財研究所、2015年
	十町	11	立会	鎌倉時代の瀧敷包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』(京都市文化観光局、1986年)
		12	試掘	河川氾濫層	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成16年度』(京都市文化市民局、2005年)
	十町	13	立会	室町時代の井戸	『左京九条三・四坊』(『昭和60年度京都市埋蔵文化財概要』[財]京都市埋蔵文化財研究所、1988年)
		14	立会	平安後期の落ち込み・瀧敷包含層、室町・江戸時代の瀧敷包含層	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成9年度』(京都市文化市民局、1998年)
	十三町	15	発掘	平安時代前期の烏丸小路路面・東側溝、鎌倉時代の井戸、室町時代後期～桃山時代前半の瀧・柱穴、平安時代後期の整地層	『左京九条三坊(1)』(『昭和58年度京都市埋蔵文化財概要』[財]京都市埋蔵文化財研究所、1985年)
		16	発掘	平安時代後期の烏丸小路路面・側溝、室町時代後期の瀧	『左京九条三坊(2)』(『昭和58年度京都市埋蔵文化財概要』[財]京都市埋蔵文化財研究所、1985年)
		17	発掘	平安時代後～鎌倉時代前期の九条坊門小路北側溝・烏丸小路東側溝、平安時代中期の土坑、平安時代後～鎌倉時代前期の土坑・柱穴・落ち込み	『平安京左京九条三坊』(『昭和60年度京都市埋蔵文化財概要』[財]京都市埋蔵文化財研究所、1988年)
		18	立会	平安～室町時代の瀧敷包含層・土坑、弥生土器	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』(京都市文化観光局、1983年)
		19	立会	平安時代後～鎌倉時代の落ち込み・瀧敷包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成8年度』(京都市文化市民局、1997年)
	十四町	20	立会	室町時代の瀧敷包含層、時期不明の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』(京都市文化観光局、1988年)
		21	立会	平安時代後期の湿地堆積	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度』(京都市文化市民局、2011年)
		22	試掘	鎌倉時代の湿地堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』(京都市文化観光局、1985年)
		23	立会	鎌倉・室町時代の瀧敷包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成7年度』(京都市文化市民局、1996年)
	十五町	24	発掘	調査検第の土器・石器出土、弥生時代の溝、平安時代前期の井戸・土坑・溝	『平安京左京九条三坊』(『昭和59年度京都市埋蔵文化財概要』[財]京都市埋蔵文化財研究所、1987年)
		25	立会	平安時代末期の瀧敷包含層	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和50年度』(京都市文化観光局、1982年)
		26	立会	平安時代後期～鎌倉時代の土坑、鎌倉時代の落ち込み、時期不明の柱穴	『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』(京都市文化市民局、2001年)
		27	試掘	近世耕作土、洪水層層、中世の包含層	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成26年度』(京都市文化市民局、2017年)

条坊		番号	調査	概要	文献
九条三坊	十六町	28	発掘	鎌倉時代の井戸・土坑・柱穴、平安時代後～室町時代の井戸、室町時代初期の建物・柱穴・溝・塀・土坑	『平安京左京九条三坊跡　京都駅南口第一幾市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査概報　昭和54年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1980年）
		29	発掘	平安時代後～室町時代前期の井戸・土坑・柱穴・塀	『左京九条三坊』（『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1982年）
		30	発掘	平安時代後～室町時代の井戸・土坑・柱穴	『平安京左京九条三坊十六町』（『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011年）
	一町	31	試掘	河川堆積層	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成28年度』（京都市文化市民局，2017年）
九条四坊	一町	32	立会	江戸時代の土取穴群、平安時代～江戸時代にかけての遺物が出土	『平安京左京九条四坊』（『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1987年）
	三町	33	発掘	平安時代後期の東洞院大路東側溝・建物跡・井戸・室町時代の井戸・土坑	京都市編『史料京都の歴史』第二巻　考古（平凡社，昭和五九年）
		34	立会	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成17年度』（京都市文化観光局，2006年）
		35	立会	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成20年度』（京都市文化観光局，2009年）
		36	立会	平安時代後期の土坑、室町時代前期の遺物包含層、下層は復地堆積	『京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度』（京都市文化観光局，1998年）
	四町	37	立会	鎌倉時代の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』（京都市文化市民局，2002年）
		38	立会	平安時代後期の落ち込み	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成23年度』（京都市文化市民局，2012年）
		39	立会	弥生～古墳時代・平安時代後期の遺物包含層、鎌倉時代後～室町時代の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報　平成10年度』（京都市文化市民局，1999年）
	五町	40	立会	平安時代中期～室町時代の遺物包含層・土坑、鎌倉時代の溝状遺構	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和56年度（京都市文化観光局，1982年）
		41	立会	同上	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成3年度（京都市文化観光局，平成4年）
		42	立会	鎌倉時代の包含層、落ち込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成4年度（京都市文化観光局，平成5年）
	六町	43	立会	室町時代の包含層、鎌倉時代の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度（京都市文化観光局，1987年）
	町十	44	試掘	江戸時代の溝構、室町時代の沼堆層	『平安京左京九条四坊』平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』財）京都市埋蔵文化財研究所，2002年
	町十一	45	立会	鎌倉～室町時代の遺物包含層・土坑	『平安京左京九条四坊』（『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1985年）
	九条大路	46	立会	室町時代の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（京都市文化観光局，1987年）
		47	立会	鎌倉～室町時代の土坑、下層に流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』（京都市文化観光局，1989年）

第３章　遺　構

第１節　基本層序

調査区地表面の標高は、南北ともに約26.0ｍとほぼ平坦である。基本層序は造成土、近世耕作土、遺物包含層（第１検出層）、地山層の順である。地表面から約１ｍ下まで、近現代の造成土が堆積する。当地は、昭和26年頃には工場として利用されており[1]、建物に伴うと思われるレンガや石敷き等が多く含まれる。造成土の下層は、近世の耕作土層である。第２章で述べたように、当地周辺は近世になると東九条村と呼ばれ、農村化が進んだ。その環境を示す土層であろう。調査区ほぼ中央部を境に、西側の耕作土層は約25～30㎝の厚さで堆積し、東側の耕作土層は、35～45㎝の厚さで堆積する。これによって調査区東側は全体的に段差を持つ。また、グリッドＣ列を境とし、調査区南北の基盤層が二分される。そのため、以下調査区を北西部、北東部、南西部、南東部に分けて、基本層序の詳細を記載する（第６図）。



第６図　調査区区分図

北西部

第１面は、約15～20㎝の厚さで堆積する黒褐色泥砂層(22層)上面である。黄褐色粘質土（地山）ブロックを全体に含み、小石や土器片も全体に含有される。標高は約24.7ｍである。

第２面は、黄褐色粘土の地山上面である。標高は約24.5ｍである。

北東部

第１面は、約10～20㎝の厚さで堆積する黒褐色泥砂層(24層)上面である。黄褐色粘質土（地山）ブロックを全体に含み、鉄分や土器片も多量に含有される。標高は約24.6ｍである。

第２面は、黄褐色粘土の地山上面である。地山面は土取り坑と思われる凹凸が顕著であることから、24層はこの凹凸を埋めるための層であったのであろう。南東部に近い付近で灰色砂層（56層）が確認できる。この層が地山でありこの付近を境に南側の地山層は粘土層から砂層となる。標高は24.5ｍである。

南西部

第１面は認められず、近世耕作土層により削平された可能性が考えられる。

第２面は、灰色砂層で形成される地山上面である。標高は24.4ｍである。

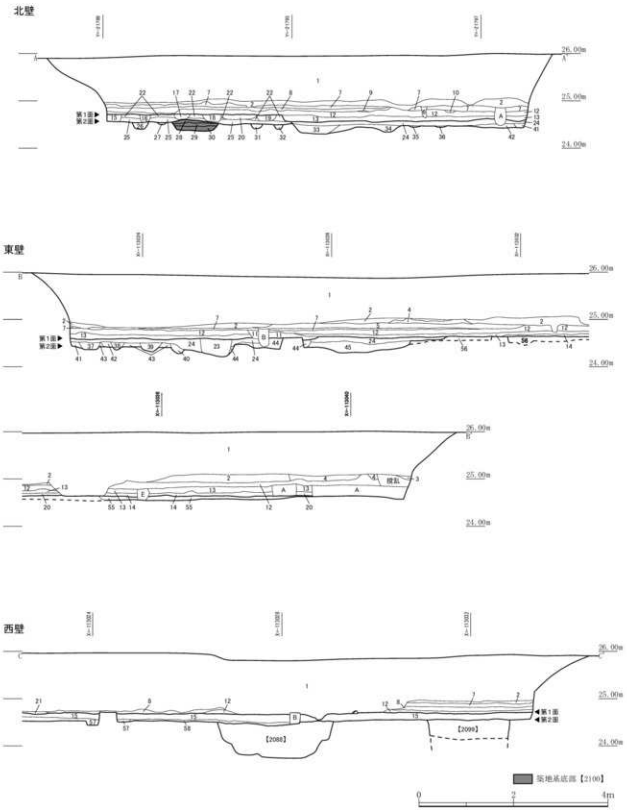
南東部

第１面は認められず、近世耕作土層により削平された可能性が考えられる。

第２面は、灰色砂層で形成される地山上面である（56層）。地山である砂層が部分的に固くしまる状況が見られた（55層）。標高は約24.6ｍである。

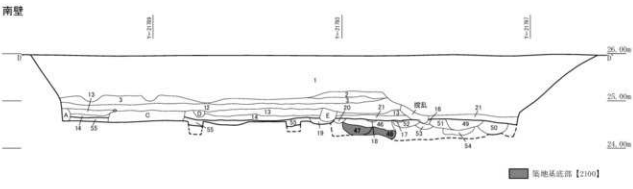
註

（１）「京都市明細図」（昭和26年）京都府立京都学・歴彩館蔵



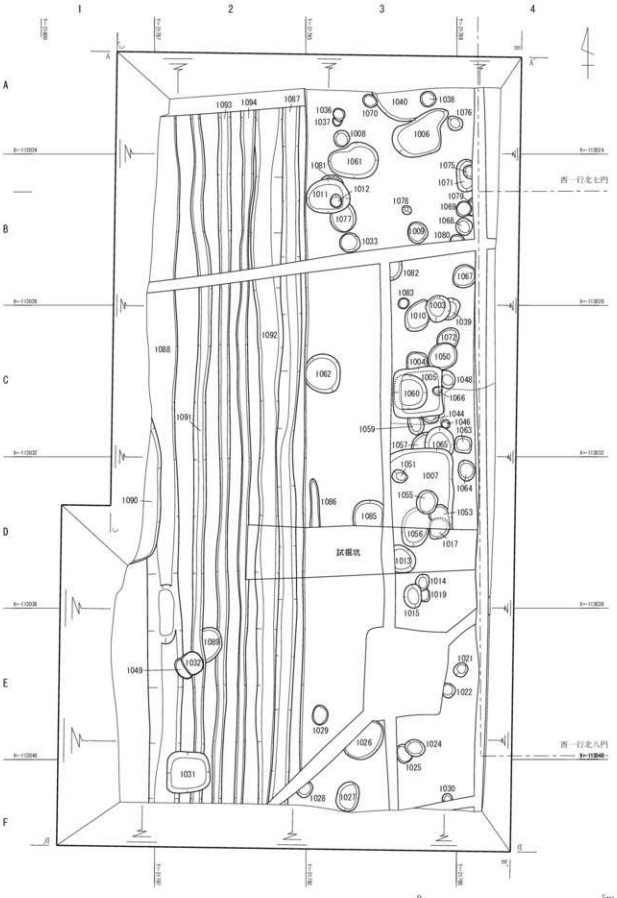
第７図　調査区北壁・東壁・西壁断面図（縮尺 1/80）

南壁

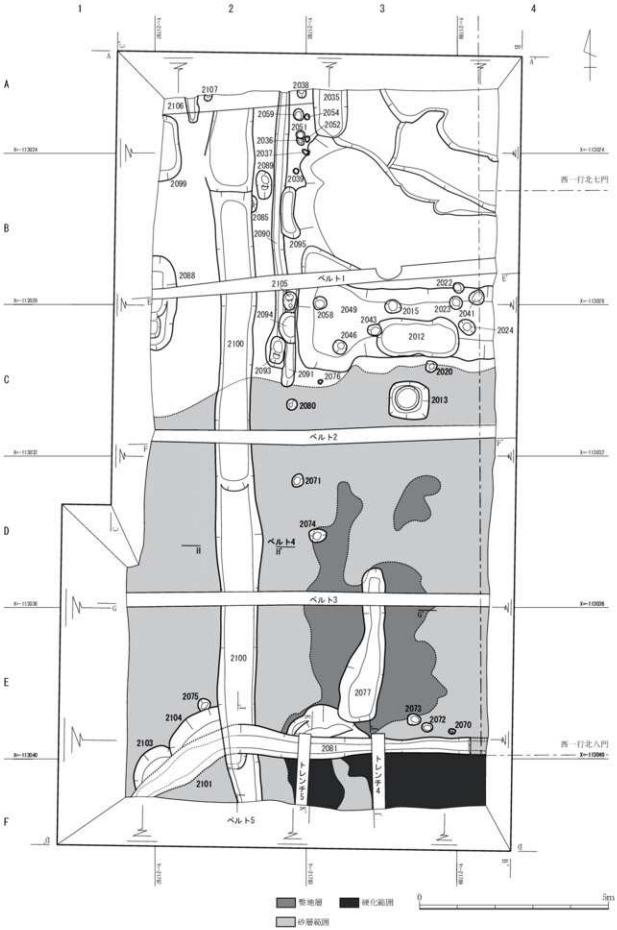


1	10YR6/4	にぶい黄橙礫層	粘性なし	しまりややあり【表土】	
2	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	粘性ややあり	しまりあり	
3	10YR3/2	黒褐色土	粘性なし	しまりあり	
4	5Y4/1	灰色粘土	粘性あり	しまりあり	
5	10YR3/3	暗褐色土	粘性ややあり	しまりあり	
6	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	粘性あり	しまりあり	
7	10YR3/4	暗褐色土	粘性弱い	しまりあり φ5cm の小石含む 粗砂混じる	
8	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色土	粘性弱い	しまりあり	
9	10YR3/3	暗褐色土	粘性弱い	しまりあり	【近世耕作土】
10	10YR3/2	黒褐色土	粘性なし	しまりややあり	
11	5Y3/1	オリーブ黒褐色粘土	粘性あり	しまりあり	
12	10YR2/3	黒褐色土	粘性弱い	しまりあり	
13	2.5Y3/2	黒褐色粘質土	粘性あり	しまりあり 土器片、鉄分含む	
14	5Y3/1	オリーブ黒色泥砂	粘性なし	しまりあり	
15	10YR3/1	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり【1088】	
16	10YR2/3	黒褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり【1091】	
17	10YR2/2	黒褐色粘質土	粘性ややあり	しまりあり【1093】	
18	10YR2/2	黒褐色粘質土	粘性ややあり	しまりあり【1094】	
19	2.5Y3/1	黒褐色泥砂	粘性ややあり	しまりあり φ3cm の小石、鉄分含む【1087】	
20	2.5Y3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり φ10cm の礫、土器片含む【1092】	
21	10YR3/3	暗褐色砂泥	粘性なし	しまりあり 土器片、φ3cm の小石含む	
22	10YR3/2	黒褐色砂泥	粘性ややあり	しまりあり φ5cm の小石、土器片含む	
23	2.5Y4/1	黄灰色泥砂	粘性なし	しまりあり φ8cm の礫、鉄分含む【2047】	
24	2.5Y3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック全体に含む 鉄分、土器片全体に含む	
25	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック全体に含む 鉄分、土器片全体に含む	
26	10YR2/3	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片、小石、鉄分含む【2108】	
27	26 に類似【2107】				
28	5Y4/2	灰オリーブ色泥砂	粘性弱い	固くしまる 鉄分含む【2106】	
29	5Y5/2	灰オリーブ色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片、鉄分含む【2100】	
30	5Y5/1	灰色砂層	粘性なし	しまりなし 鉄分含む【2100】	
31	10YR3/3	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 小石、鉄分含む【2090】	
32	10YR3/4	暗褐色泥砂	粘性あり	しまりあり 小石、鉄分含む【2038】	
33	2.5Y4/3	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片、鉄分含む	
34	2.5Y4/6	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片、鉄分含む	
35	2.5Y4/3	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり	
36	2.5Y4/3	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり	
37	2.5Y4/1	黄灰色泥砂	粘性なし	しまりあり 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土ブロック多量に含む【2009】	
38	2.5Y4/2	暗灰黄色泥砂	粘性なし	しまりあり 鉄分含む【2031】	
39	2.5Y3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片含む【2069】	
40	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片含む【2048】	
41	2.5Y4/3	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり【2036】	
42	5Y3/1	オリーブ黒色泥砂	粘性なし	しまりあり【2032】	
43	2.5Y4/1	黄灰色泥砂	粘性なし	しまりあり【2009】	
44	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック全体に含む 鉄分、土器片全体に含む	
45	2.5Y4/2	暗灰黄色泥砂	粘性なし	しまりあり 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土ブロック全体に含む【2049】	
46	10YR4/2	灰黄褐色泥砂	粘性なし	しまりあり	
47	5Y3/2	オリーブ黒色粘質土	粘性あり	固くしまる 砂利、鉄分含む【2100】	
48	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土	粘性あり	しまりあり【2108】	
49	5Y4/2	灰オリーブ色泥砂	粘性あり	しまりあり 土器片、角礫含む 底部に粗砂含む【1088】	
50	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり 底部に粗砂含む	
51	5Y4/1	灰色砂泥	粘性なし	しまりあり	
52	10YR3/3	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりややあり φ5cm の小石、土器片含む	
53	10YR3/4	暗褐色砂泥	粘性なし	しまりあり 土器片含む	
54	10YR3/4	暗褐色泥砂	粘性ややあり	しまりあり 土器片含む	
55	5Y4/2	灰オリーブ色砂質土	粘性なし	しまりあり 土器片、粘質土少量含む	
56	5Y4/1	灰色砂層	粘性なし	しまりあり 10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック、鉄分含む【地山】	
57	10YR3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり【1090】	
58	10YR3/4	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりあり 土器片、φ10cm の礫含む 鉄分硬化【1088】	
A	10YR4/1	褐灰色粘質シルト	粘性なし	しまりあり φ10cm の円礫多量に含む	
B	10YR4/2	灰黄褐色泥砂	粘性なし	しまりあり φ5cm の円礫多量に含む	
C	10YR3/2	黒褐色粘質土	粘性なし	しまりあり φ15cm の円礫多量に含む	【近世溝】
D	10YR4/1	灰褐色泥砂	粘性ややあり	しまりあり φ5cm の円礫多量に含む	
E	10YR2/3	黒褐色粘質土	粘性あり	しまりあり φ10cm の円礫多量に含む	

第８図　調査区南壁断面図（縮尺 1/80）



第９図　第１面全体図（縮尺 1/100）



第10図　第2面全体図　(縮尺 1/100)

第２節　遺構の概要

発掘貯砂では、平安時代後期～室町時代前半の遺構を確認した。検出した遺構は、東洞院大路東側築地基底部、井戸、土取り坑、土坑、ピット等である。これらの遺構を第Ⅰ期平安時代後期～鎌倉時代前半とし、第Ⅱ期を鎌倉時代前半～室町時代前半を２時期に分けた。

第３表　遺構概要表

時　　代	主な遺構
鎌倉時代前期～室町時代前期 （第Ⅱ期）	溝状遺構 （1087、1088、1091 ～ 1094） 土坑（1006）、土取り坑 ピット
平安時代後期～鎌倉時代前期 （第Ⅰ期）	溝（2081） 築地基底部（2100） 井戸（2013、2099） 土坑（2073、2088） ピット

第３節　第１面の遺構

１．遺構各説

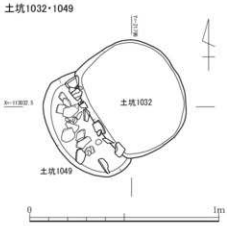
土坑1006（第11図）

Ａ３グリッドに位置する土坑である。平面の形状は不定形楕円形を呈する。規模は長軸1.64m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は鉄分を含む灰色砂質シルトである。土坑壁面や底面の地山は、青灰色に変色する。出土遺物から、時期は12世紀中頃～13世紀前半（京都Ⅴ期中～京都Ⅵ期中）と考えられる。

第 11 図　第１面　土坑 1006 完掘状況

土坑1032・1049（第12図）

Ｅ２グリッドに位置する土坑である。土坑1032が土坑1049より新しい。土坑1049から礫及び土器が出土した。土器は、土師器皿と羽釜の破片で、角礫と混在した状態で出土した。出土遺物は12世紀後半（京都Ⅴ期新）のものであるが、遺構の重複関係から13世紀前半（京都Ⅵ期中）以降の遺構と考えられる。



第 12 図　第１面　土坑 1032・1049（縮尺 1/20）

溝1087（第13図）

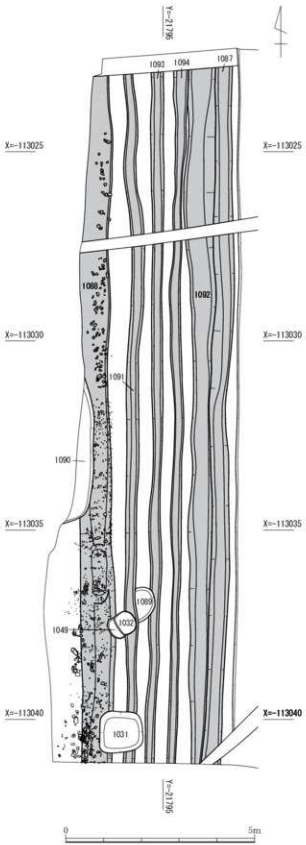
Ａ～Ｆ２グリッドに位置する溝状遺構である。調査区を南北方向に縦断するよう検出された。規模は南北18.43m以上、幅0.45～0.55m、深さ約0.15mを測る。断面形状は皿状を呈する。南北は調査区外に続く。埋土はオリーブ黒色泥砂を基調とし、全体的に鉄分を少量含む。溝1092と重複し、溝1092より新しい。出土遺物から、時期は12世紀中頃（京都Ⅴ期中）と考えられる。

溝1088（第13図）

Ａ～Ｆ２グリッドに位置する。調査区を南北方向に縦断するよう検出された溝状遺構である。規模は南北18.13m以上、幅0.9m、深さ0.2～0.3mを測る。断面形状は皿状を呈する。南北は調査区外に続く。溝内Ｂ・Ｃ２グリッド及びＥ・Ｆ２グリッドにおいて、底面に礫や土器がまばらに検出された。出土した土器は、土師器や瓦である。埋土は基本的にオリーブ褐色泥砂であるが、部分的に２層に分けられる。Ｂ・Ｃ２グリッドでは、下層に暗褐色泥砂が、Ｅ・Ｆ２グリッドでは黄灰色砂質土が堆積し、鉄分が底面に沈着する。出土した礫や土器はこの下層に属する。土坑1032、1049より古い。出土遺物から、時期は12世紀後半～13世紀前半（京都Ⅴ期新～Ⅵ期中）と考えられる。

溝1091（第13図）

Ａ～Ｆ２グリッドに位置する溝状遺構である。調査区を南北に縦断するよう検出された。規模は南北18.21m以上、幅0.28～0.35m、深さ0.12～0.15mを測る。断面形状はＵ字状を呈する。南北は調査区外に続く。埋土は黒褐色泥砂を基調とする。土坑1032、1049より古く、土坑1089より新し



第13図　第１面
溝1087・1088・1091～1094（縮尺1/100）

い。出土遺物から、時期は11世紀～12世紀中頃（京都Ⅳ期～京都Ⅴ期中）と考えられる。

溝1092（第13図）

Ａ～Ｆ２グリッドに位置する溝状遺構である。調査区を南北方向に縦断するよう検出された。規模は南北18.38m以上、幅0.64～0.82m、深さ0.15～0.2mを測る。断面形状は皿状を呈する。南北は調査区外に続く。埋土は黒褐色泥砂を基調とし、全体的に土器片や小礫を含む。溝1087、1094と重複し、溝1087、1094より古い。出土遺物から、時期は12世紀代（京都Ⅴ期）と考えられる。

溝1093（第13図）

Ａ～Ｆ２グリッドに位置する溝状遺構である。調査区を南北方向に縦断するよう検出された。規模は南北18.27m、幅0.28～0.34m、深さ0.05mを測る。断面形状は皿状を呈する。南北は調査区外に続く。埋土は黒褐色泥砂を基調とする。出土遺物から、時期は11世紀末～12世紀中頃（京都Ⅴ期古～中）と考えられる。

溝1094（第13図）

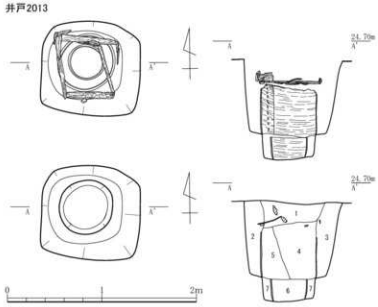
Ａ～Ｆ２グリッドに位置する溝状遺構である。調査区を南北方向に縦断するよう検出された。規模は南北18.32m以上、幅0.18～0.4m、深さ0.04～0.15mを測る。断面形状は皿状を呈する。南北は調査区外に続く。埋土は黒褐色泥砂を基調とする。形状、埋土ともに溝1093と類似する。溝1092と重複し、溝1092より新しい。出土遺物から、時期は13世紀後半～14世紀前半（Ⅶ期）と考えられる。

第４節　第２面の遺構

１．遺構各説

井戸2013（第14図）

井戸枠は、最下部の横桟と北側横桟の西隅において縦板が僅かに残存していた。この状況から方形縦板横桟組とみられる。横桟は、一辺約0.6mの方形木枠組である。木枠の下には、２段からなる曲物が据えられていた。一段目の曲物は、径約60cm、深さ40cmでやや大型である。この曲げ物は、粒子の粗い砂礫層上面まで達する。この砂礫層を約20cm掘り込み径40cmの曲げ物が据えられていた。確認面からの井戸の深さは約1.1mあり、底部の標高は23.45mである。



1　10YR4/2　灰黄褐色シルト質泥砂　粘性ややあり　しまりあり　鉄分含む
2　10YR4/1　褐灰色砂泥　粘性なし　しまりあり　φ5cmの礫・砂粒含む　鉄分含む【版方】
3　10YR4/2　灰黄褐色砂泥　粘性あり　しまりあり　ややシルト質　砂粒・鉄分含む【版方】
4　5Y4/1　灰色粘土　粘性あり　しまりあり　φ3cmの礫少量含む
5　5Y4/1　灰色泥砂　粘性あり　しまりあり　鉄分多量に含み酸化する
6　5B5/1　青灰色泥土　粘性あり　しまりあり　底面に鉄分多量に含む
7　5Y6/1　灰色砂礫層　粘性なし　しまりややあり　φ5cm円礫多量に含む
10YR4/6褐色粘質土ブロック含む　鉄分含む【版方】

第14図　第２面　井戸2013（縮尺1/40）

出土した遺物から12世紀から13世紀（京都Ⅴ期～京都Ⅵ期）とかんがえられる。

土坑2073（第15図）

Ｅ３グリッドに位置する土坑である。平面形状は円形を呈する。規模は径0.34m、深さ0.04mを測る。土器及び小礫がまとまって出土した。出土状況は、土器が南東側、小礫が南西側と偏りが見られた。土器は、完形の土師器小皿と瓦器碗小片が出土し、土師器皿は伏せた状態であった。瓦器碗は口縁部の破片で、土師器小皿にかぶせるような状態で検出された。小礫は径６cm以下のまとまりである。出土遺物から、時期は11世紀後半（京都Ⅳ期新）と考えられる。

第15図　第２面　土坑2073遺物出土状況

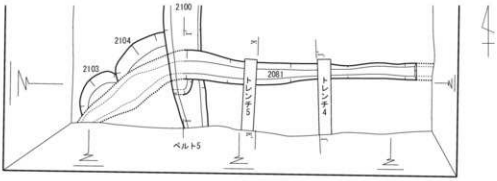
溝2081（第16図）

Ｅ２～４グリッドに位置する。調査区を東西方向に横断するように検出された溝である。規模は東西6.2m、幅約0.3～0.6m、深さ約0.35mを測る。東端は、撹乱により切られるが、東へ続くと思われる。対面の西壁面においては、溝状遺構は観察されなかったため、西へは続かないと考えられる。Ｅ２グリッドにおいて、南北方向の築地基底部2100と直交する。断面形状はＵ字状を呈し、埋土は下層が灰色砂で、鉄分が層状に沈着する。全体に土師器の小片を含むが、特に築地基底部2100との交差地点及び築地基底部2100を越えた地点において多く出土した。上層は黄灰色泥砂が堆積する。築地基底部2100との交差地点において、礫が確認された。

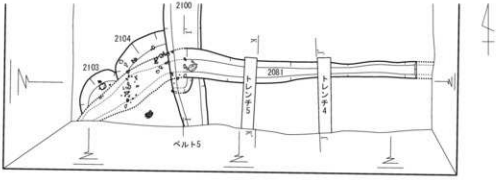
築地基底部2100との交差地点の構造は、築地基底部2100を溝2081が、東西に横切る形である。交差地点において、径約20cmの礫及び小礫を多数確認したが、築地基底部に暗渠を構築したのか、もしくは部分的に築地が途切れたのか断定には至らない。しかし、確実に築地を横切っていることから、排水のため東洞院大路の外溝へ取りつくよう設計された可能性が考えられる。

溝2081は四行八門の推定線から考えると、信濃小路の北側築地内溝の可能性がある。出土遺物から時期は11世紀末～12世紀前半（京都Ⅴ期古）と考えられる。

溝2081　完掘状況



礫出土状況



0　5m

ベルト5

1　10YR3/1　黒褐色泥砂　粘性ややあり　しまりあり　土器片含む
2　2.5Y4/1　黄灰色泥砂　粘性ややあり　しまりあり
φ6cm礫、土器含む【2081】
3　5Y4/1　灰色砂礫　粘性なし　しまりややあり
土器片含む　鉄分がラミナ状に堆積する【2081】
4　10YR4/1　褐灰色泥砂　粘性ややあり　固くしまる　土器含む【2100】
5　5Y4/3　緑オリーブ粘質土　粘性あり　しまりあり　土器片含む【2100】
6　5Y5/1　灰色粘土　粘性あり　しまりあり　鉄分含む【2100】

トレンチ4

1　10YR4/1　褐灰色泥砂　粘性ややあり　しまりあり　鉄分含む【2081】
2　5Y4/1　灰色粗砂礫　粘性なし　しまりあり
3　5Y5/1　灰色砂礫　粘性なし　しまりあり　鉄分が互層状に堆積する】

トレンチ5

1　2.5Y4/1　黄灰色泥砂　粘性なし　しまりあり
10YR4/6褐色粘質土ブロック含む　鉄分少量含む
2　2.5Y4/3　オリーブ褐色泥砂　粘性なし　しまりあり
鉄分多量含む　粗砂かたくしまる

0　2m

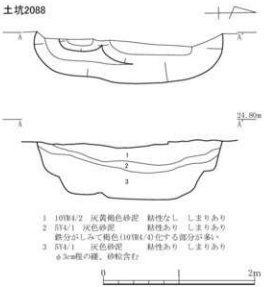
第16図　第2面　溝2081（縮尺1/50、1/100）

土坑2088（第17図）

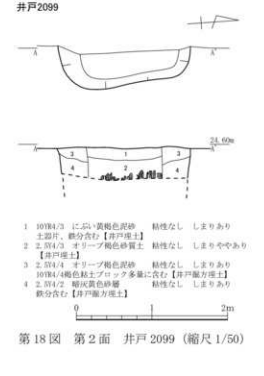
Ｂ・Ｃ２グリッドに位置する大型土坑である。西側は調査区外へ続くが、平面形状は隅丸方形を呈する。規模は長軸2.5m、短軸0.55m、深さ0.7mを測る。埋土は、３層に分けられるが、灰色もしくは暗灰色を呈する粘土層である。上層は鉄分を含み、底面では見られない。出土遺物から、時期は11世紀末～12世紀後半（京都Ⅴ期）と考えられる。

井戸2099（第18図）

Ａ・Ｂ２グリッドに位置する井戸である。遺構西側の大部分は調査区外へ続くが、平面形状は隅丸方形を呈する。規模は長軸1.72m、短軸0.45m以上、深さ0.45m以上を測る。井戸掘方埋土は、２種に分けられる。上層はオリーブ褐色泥砂で、褐色粘土(地山)ブロックを多量に含む。下層は暗灰黄色砂層で鉄分を含む。上端から30cm程下面で、縦板を確認したが、遺構の大部分が調査区外となり、埋土が砂層であることから壁面崩落の恐れを伴うため、これ以上の掘削は不可能と判断した。掘方から遺物が出土しており、時期は11世紀末～12世紀中頃（京都Ⅴ期古～中）と考えられる。



第17図　第２面　土坑2088（縮尺1/50）



第18図　第２面　井戸2099（縮尺1/50）

築地基底部2100（第19・20図）

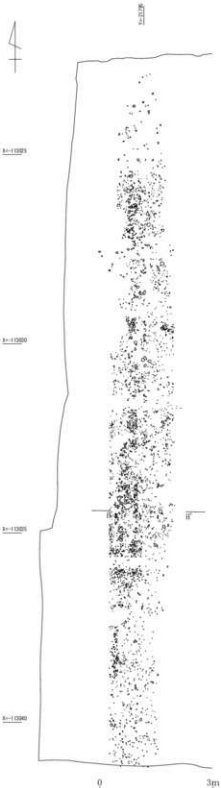
Ａ～Ｆ２グリッドに位置する。調査区を南北方向に縦断するよう検出された築地基底部である。規模は南北18.7m以上、幅0.9～1.2m、深さ約0.2～0.4mを測る。南北は調査区外に続く。東洞院大路東側築地芯想定線から約6.5m西へずれる。

築地基底部2100は地山面から溝状に掘り込まれ、断面形状は底部がほぼ平らな皿状を呈する。調査区北側において、一部地山が尖形に残存する。

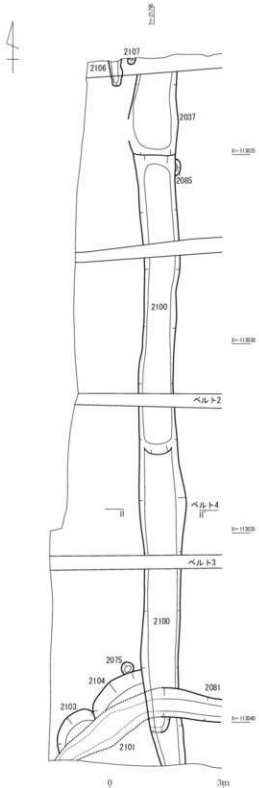
埋土は大きく２～３層に分けられる。下層は、灰色粘土で、溝底面から上端までの間に堆積し、固くしまる。上層は、灰色や褐灰色を呈する泥砂で、砂利や土器片、小礫を含有し（第20図）、溝上端から堆積し固くしまる。高さは溝上端から２～12cmを測る。この基底部の上部に築地本体が築かれていたと考えられる。

溝2081との交差地点において、築地基底部2100の底面が深さ15cm程掘り込まれる。これはおそらく先述した、東西方向の溝である溝2081の排水のために、南北方向の東洞院大路東側溝に取りつける必要があったためであろう。溝2081が築地基底部2100よりも深度があり、築地基底部2100の底面を溝2081の底面に合わせたと考えられる。

築地基底部2100上層、下層それぞれの埋土から出土した土器に時期差はなく、11世紀中頃～11世紀後半（京都Ⅳ期古～京都Ⅳ期中）と考えられる。



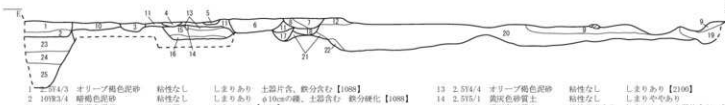
第19図　第2面　築地基底部2100
礫検出状況平面図（縮尺1/100）



1　10YR3/3　暗褐色泥砂　粘性なし　しまりあり　鉄分硬化　φ10cmの礫多量含む【2100】
2　10YR4/1　褐灰色粘質土　粘性ややあり　しまりあり　鉄分硬化　土器片含む【2100】
3　7.5Y4/1　灰色粘土　粘性あり　しまりあり　鉄分硬化【2080】

第20図　第2面　築地基底部2100
土層断面図及び完掘平面図（縮尺1/50、1/100）

ベルト1



1	2.5Y4/3	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　土器片含、鉄分含む【1088】
2	10YR3/4	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　φ10cmの礫、土器片含む　鉄分硬化【1088】
3	10YR2/3	黒褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり【1091】
4	10YR2/2	黒褐色粘質土	粘性ややあり	しまりあり【1093】
5	10YR2/1	黒褐色粘質土	粘性ややあり	しまりあり【1094】
6	2.5Y3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　φ10cmの礫、土器片含む【1092】
7	2.5Y4/2	暗灰黄色泥砂	粘性なし	しまりあり　鉄分少量含む【1087】
8	5Y3/2	オリーブ黒色砂質シルト	粘性ややあり	鉄分少量含む【1087】
9	5Y3/2	オリーブ黒色泥砂	粘性なし	しまりあり　砂粒含む
10	2.5Y4/3	オリーブ褐色泥砂		
11	10YR3/4	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　土器片含む
12	2.5Y4/2	暗灰黄色泥砂	粘性なし	しまりあり　土器片、小石含む
13	2.5Y4/4	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり【2100】
13	2.5Y4/4	オリーブ褐色泥砂	粘性なし	しまりあり【2100】
14	2.5Y5/1	黄灰色砂質土	粘性なし	しまりややあり
15	10YR4/1	褐灰色粘質土	粘性ややあり	しまりあり　土器片含む　鉄分硬化【2100】
16	7.5Y4/1	灰色粘土	粘性あり	しまりあり　底面に鉄分付着【2100】
17	2.5Y4/1	黄灰色泥砂	粘性なし	しまりあり　地山ブロック10%含む　鉄分含む【2096】
18	2.5Y4/2	暗黄灰色泥砂	粘性なし	しまりあり　地山ブロック15%含む　土器片、小石、鉄分含む【2094】
19	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性弱い	しましあり　φ5cmの礫少量含む
20	2.5Y4/1	黄灰色泥砂	粘性なし	しまりあり　地山ブロック30%含む　φ8cmの礫全体に含む　鉄分含む
21	10YR5/2	灰黄褐色粘質土	粘性ややなし	しまりあり
22	10YR4/1	褐灰色粘土	粘性あり	しまりあり
23	N4/1	灰色粘土	粘性あり	しまりあり　鉄分含む【2088】
24	N3/1	暗灰色粘土	粘性あり	鉄分含む【2088】
25	7.5Y4/1	灰色粘土	粘性あり	しまりあり【2088】

ベルト2

1	2.5Y3/2	黒褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり　10YR4/4褐色砂質土が上面全体に堆積【現表】
2	2.5Y3/1	黒褐色泥砂	粘性ややあり	しまりあり　φ3cmの石含む　鉄分含む【1087】
3	2.5Y3/2	黒褐色砂質土	粘性なし	しまりややあり　鉄分含む【1087】
4	5Y2/2	オリーブ黒色泥砂	粘性なし	しまりあり　砂利、土器片、鉄分含む【1092】
5	10YR3/3	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　φ10cmの礫、小石含む
6	2.5Y5/1	灰色砂層	粘性なし	しまりあり　鉄分含む
7	10YR3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり【1090】
8	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり【1088】
9	10YR2/3	黒褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり【1091】
10	10YR2/2	黒褐色粘質土	粘性ややあり	しまりあり【1093】
11	10YR2/1	黒褐色粘質土	粘性ややあり	しまりあり【1094】
12	5Y2/2	オリーブ黒色泥砂	粘性なし	しまりあり　砂利、土器片含む
13	5Y4/1	灰色粗砂層	粘性なし	しまりあり　粗砂硬化
14	10YR4/1	褐灰色粘質土	粘性ややあり	しまりあり　土器片含む　鉄分硬化【2100】
15	7.5Y4/1	灰色粘土	粘性あり	しまりあり　底面鉄分沈着【2100】
16	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥砂	粘性あり	しまりあり　土器片含む
17	10YR3/4	暗褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　土器片、φ10cmの礫含む　鉄分硬化【1088】
A	7.5Y4/1	灰色砂	粘性なし	しまりややあり【近世撹乱】

ベルト3

1	2.5Y4/1	黄灰色砂質土	粘性なし	しまりあり　鉄分硬化【1088】
2	10YR2/1	黒褐色粘質土	粘性あり	しまりあり【1094】
3	10YR3/1	黒褐色砂層	粘性なし	固くしまる　鉄分含む【1091】
4	5Y4/1	灰色泥砂	粘性なし	しまりあり　砂利、土器片含む【1093】
5	5Y5/1	灰色粘質土	粘性あり	固くしまる　砂利含む　底面鉄分沈着【1094】
6	10YR2/2	黒褐色粘質土	粘性あり	しまりあり【1087】
7	10YR3/1	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり
8	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	粘性あり	しまりあり【1092】
9	10YR3/2	黒褐色泥砂	粘性弱い	しまりあり
10	10YR3/3	暗褐色泥砂	粘性ややあり	しまりあり　鉄分少量含む
11	5Y3/1	オリーブ黒色泥砂	粘性弱い	しまりあり　土器片、鉄分含む【2100】
12	2.5Y3/2	黒褐色泥砂	粘性なし	しまりあり　φ10cm礫、土器片含む【2100】

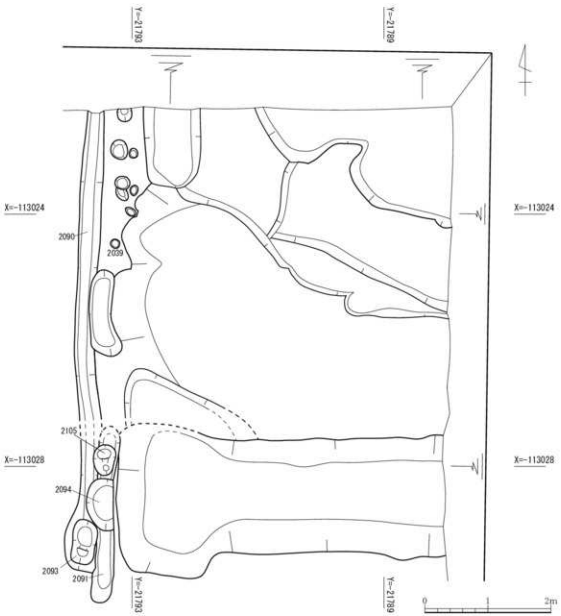
Ⅱ．硬化範囲

１）硬化範囲

溝2018の南側、Ｆ３～４グリッド付近において硬化面が認められた。この硬化が人為的なつき固めであるか否かの確認を行うためサブトレンチ４・５を掘削し断面観察を行った。硬化した砂層は厚さ３～５cmほどで堆積し、断面からはラミナ状の堆積がみられた。遺物の出土は無く人為的か自然によるものかの判断はできなかったが、堆積状況がラミナ状であることや遺物が出土していない状況からは自然堆積層である可能性が高いと考えられる。

２）土取り坑2049（第22図）

Ａ～Ｃ３～４グリッドに位置する。南北方向に検出した土坑群である。北および東側は調査区外へ延びる。土坑は少なくとも、６基の単位がみられ複数回にわたり掘削されたものと考えられる。調査地周辺は、九条土と呼ばれる良質の粘土を産出する地域で有り、地山が黄褐色粘土であるところにのみ分布し、南側の砂層域では見られないことから土取り坑と判断した。



第22図　第２面　土取り坑（縮尺1/60）

第４章　遺物

第１節　遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ数で20箱である。なお、整理段階でランク分けを行った結果、15箱となった。遺物の種類は、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦、木製品など、平安時代後期～近代までの遺物が出土した。

以下、時期別・遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第８表の出土遺物観察表に記載した。

第４表　遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代前期～室町時代前期	土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、白磁、山茶碗		土師器14点、須恵器１点、瓦質土器５点、青磁１点、白磁３点、山茶碗１点		
平安時代後期～鎌倉時代前期	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白色土器、白磁、陶器、山茶碗、瓦		土師器17点、須恵器４点、瓦器２点、瓦質土器３点、白色土器１点、白磁７点、陶器１点、山茶碗２点、瓦３点		
合計		15箱	61点(5箱)	1箱	9箱

第２節　第１面の遺物

土坑1006（第23図）

１は土師器の皿である。口縁部に浅い二段ナデを施し、口縁端部は丸く収まる。２は山茶碗の小皿である。底部は平底で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部は外傾した面を成し、端面全体に自然釉がかかる。尾張型の第６型式に分類でき、13世紀前半のものと思われる。

土坑1006から出土した遺物は12世紀中頃～13世紀前半（京都Ⅴ期中～京都Ⅵ期中）に位置づけられる。

土坑1011・1012（第23図）

３、４は瓦質土器の鍋である。３は直線的な体部で、口縁部は屈曲して立ち上がり、受け口状を呈する。口縁端部は内側に折り返し、端面は外傾する。体部、口縁部外面に煤が付着する。４は口縁部のみ残存するが、器形は３と同じく屈曲して立ち上がり、受け口状を呈する。

土坑1011・1012から出土した遺物は13世紀後半～14世紀前半（京都Ⅶ期新～京都Ⅶ期中）に位置づけられる。

土坑1049（第23図）

５は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。口縁端部は断面が三角形である。６は土師器の羽釜である。10世紀前半～11世紀前半（京都Ⅱ期新～京都Ⅳ期古）の混入品と考えられる。

土坑1049から出土した遺物は12世紀後半（京都Ⅴ期新）に位置づけられる。

溝1087（第23図）

7は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施すが、下段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。口縁端部は断面三角形を呈する。8は青磁の壺である。口縁部は肥大し、口縁端部は内傾する。9は土師器の甕である。体部外面はタタキ及びナデにより成形される。口縁部外面には煤が付着し、口縁端部は内側へ強く折り返す。

溝1087から出土した遺物は12世紀中頃（京都Ⅴ期中）に位置づけられる。

溝1088（第23図）

10、11は瓦質土器の三足付羽釜である。10は半球形で、体部上半に最大径を持つ。鍔から口縁部までの立ち上がりは短く、口縁端部は内傾する。11は10に比べ体部がやや面長である。体部外面には全体的に煤が付着する。12～14は土師器の皿である。12は皿N小、13・14は皿N大に類する。いずれも口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。口縁端部は、外傾した面を成し、断面は三角形を呈する。15は白磁の碗である。逆台形の削り出し高台で、底部外面から体部下半外面にかけては露胎である。胎土は黄色味のある軟質なもので、体部の釉調はやや黄色味を帯びた白色を呈する。北宋後半代のものと考えられる。

溝1088から出土した遺物は12世紀後半～13世紀前半（京都Ⅴ期新～Ⅵ期中）に位置づけられる。

土坑1089（第23図）

16は白磁の碗である。逆台形の削り出し高台で、底部外面は露胎である。見込みに沈線が巡る。胎土は黒色粒子を含む白色で、体部の釉調はやや水色味を帯びた白色を呈する。北宋前半代のものと考えられる。

土坑1089から出土した遺物は11世紀中頃～12世紀初頃（京都Ⅳ期中～Ⅴ期古）に位置づけられる。

溝1091（第23図）

17、18は土師器の皿である。17はいわゆるコースター形と呼ばれる形式である。円盤状の底部周縁部が浅く凹み、そこから口縁端部を内側へ折り返す。18は口縁部上半がやや外反し、口縁端部は丸く収まる。

溝1091から出土した遺物は11世紀～12世紀中頃（京都Ⅳ期～Ⅴ期中）に位置づけられる。

溝1092（第23図）

19は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態である。口縁部上半がやや外反し、口縁端部は丸く収まる。20は瓦質土器の羽釜である。口縁部上半に貼付突帯が巡る。口縁端部は面を成し、端面は浅く凹む。

溝1092から出土した遺物は12世紀代（京都Ⅴ期）に位置づけられる。

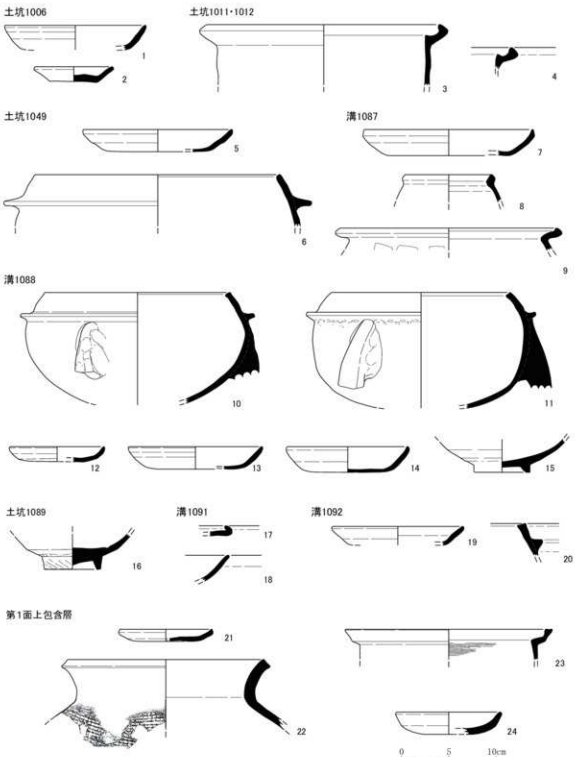
第１面上包含層（第23図）

21は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。口縁端部は、外傾する面を持ち、断面は三角形を呈する。22は播磨系と思われる須恵器の甕である。体部外面にタタキによる成形痕が残る。頸部は「く」の字に折れ、口縁部はやや外反する。口縁端部は外傾した面を成し、浅く凹む。胎土がやや粗く、焼成が甘い。23は瓦質土器の

鍋である。直線的な体部で、口縁部は屈曲して立ち上がり、受け口状を呈する。口縁端部は水平な面を成し、端面は浅く凹む。13世紀初頭～中頃（京都Ⅵ期中～新）のものと考えられる。

24は土師器の皿である。底部から体部にかけての器壁が厚く、口縁部に向かって薄くなる。口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。口縁端部は丸く収まる。

第１面上包含層から出土した遺物は11世紀末～13世紀（京都Ⅴ期～京都Ⅵ期）に位置づけられる。



第23図　第１面　出土遺物実測図（縮尺1/4）

第３節　第２面の遺物

井戸2013（第24図）

25は白色土器の皿の底部である。底部は回転糸切痕をそのまま残して仕上げる。26は白磁碗の口縁部である。口縁端部は、断面三角形の玉縁状を呈する。北宋前半代のものと考えられる。

井戸2013から出土した遺物は12世紀～13世紀（京都Ⅴ期～京都Ⅵ期）に位置づけられる。

溝2047（第24図）

27は白磁碗の底部である。逆台形の削り出し高台で、底部外面は露胎である。胎土は、黄色味のある軟質なもので、体部の釉調はやや黄色味を帯びた白色を呈する。北宋後半代のものと考えられる。

溝2047から出土した遺物は12世紀代（京都Ⅴ期）に位置づけられる。

溝2048（第24図）

28は瓦器の碗である。貼付高台で、摩滅の為調整が不明瞭であるが、体部下半内面にヘラミガキが残る。口縁部はわずかに肥大し、口縁端部は丸く収まる。

溝2048から出土した遺物は12世紀代（京都Ⅴ期）に位置づけられる。

土坑2049（第24図）

29は須恵器の片口鉢である。体部は直線的に外へ開き、口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。口縁端部は、断面三角形の玉縁状である。30は土師器の鍋である。体部に短い鍔を持ち、口縁部は内側へ屈曲する。口縁端部は外側へ折り返す。31は瓦質土器の羽釜である。体部上半に最大径を持ち、鍔は短く端面は外傾する。口縁端部は内傾した面を成し、端面は浅く凹む。32は瓦質土器の鍋である。直線的な体部で、口縁部は屈曲して立ち上がり、受け口状を呈する。口縁端部は外傾した面を成し、端面は浅く凹む。

土坑2049から出土した遺物は13世紀代（京都Ⅵ期～京都Ⅶ期古）に位置づけられる。

土坑2073（第24図）

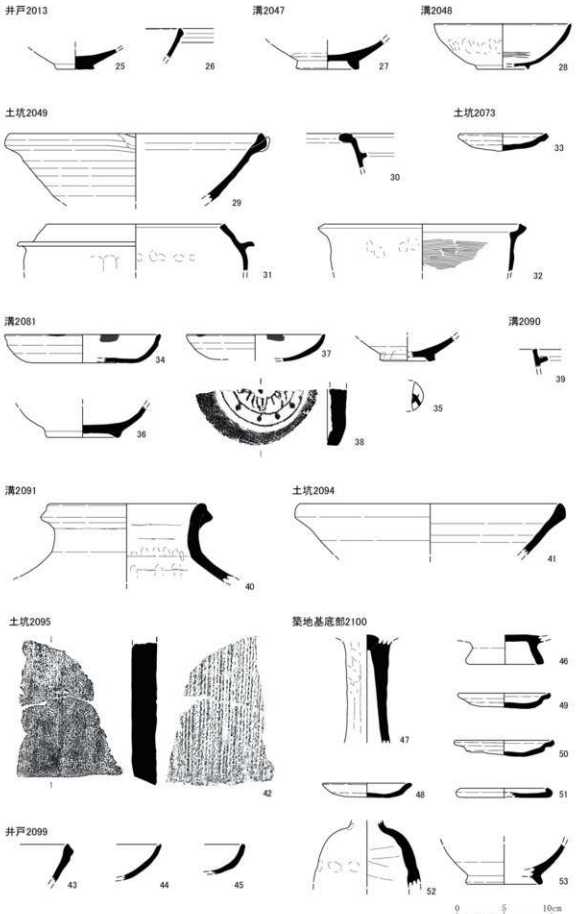
33は土師器の皿である。いわゆる「て」字状口縁で、丸底の状態に近い歪な底部を呈する。口縁端部は内上方へ突起させずに肥大した状態で収まる。全体的に粗い成形である。

土坑2073から出土した遺物は11世紀後半（京都Ⅳ期新）に位置づけられる。

溝2081（第24図）

34は土師器の皿である。体部上半から口縁部に二段ナデを施す。口縁部上半から端部は上方へ立ち上がり外反する。口縁端部は丸く収まる。35は白磁碗の底部である。底部外面に墨書が確認できるが、判読はできない。逆台形の削り出し高台で、底部外面は露胎である。胎土は、黄色味のある軟質なもので、体部の釉調はやや黄色味を帯びた白色を呈する。36は山茶碗の碗の底部である。底部は回転糸切痕が残り、高台は貼付高台である。体部内面に自然釉がかかる。37は土師器の皿である。口縁部に浅い二段ナデを施し、口縁端部は丸く収まる。口縁部内外面に煤が付着する。38は軒丸瓦の瓦当である。外区に連珠文が連なり、内区にも文様があるが詳細は不明である。

溝2081から出土した遺物は11世紀末～12世紀前半（京都Ⅴ期古）に位置づけられる。



第24図　第2面　出土遺物実測図1（縮尺1/4）

溝2090（第24図）

39は瓦質土器の羽釜である。鍔から口縁部までの立ち上がりは短く、口縁端部はやや内傾する。

溝2090から出土した遺物は12世紀代（京都Ⅴ期）に位置づけられる。

溝2091（第24図）

40は陶器の甕である。常滑焼か。頸部は体部上半から上方に外反し、立ち上がる。口縁部は断面三角形の玉縁状を呈する。

溝2091から出土した遺物は12世紀代（京都Ⅴ期）に位置づけられる。

土坑2094（第24図）

41は須恵器の鉢である。播磨系と思われる。体部は直線的に開き、口縁部は肥大する。口縁端部は断面三角形を呈する。生産年数が長いため、時期の特定はできないが、Ⅴ期～Ⅷ期の間のものと思われる。

土坑2094から出土した遺物は13世紀代（京都Ⅵ期～Ⅶ期）に位置づけられる。

土坑2095（第24図）

42は平瓦である。凹面、凸面ともに縄目痕が残る。

土坑2095から出土した遺物はこの１点のみであり、遺物・遺構ともに時期は不明である。

井戸2099（第24図）

43は須恵器の鉢である。体部は直線的に開き、口縁部との接続部分は段を成す。口縁端部は、外傾した面を成し、少し凹む。断面は三角形を呈する。44は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施すが、下段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。45は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施す。口縁端部は丸く収まる。

井戸2099から出土した遺物は11世紀末～12世紀中頃（京都Ⅴ期古～中）に位置づけられる。

築地基底部2100（第24図）

46は土師器の台付皿である。貼付高台で、端部は丸く収まる。皿底部は平底である。47は土師器の高坏脚部である。面取り状に縦方向のヘラケズリが施され、脚部が10cm以上と長い。10世紀前半～11世紀初頭（京都Ⅲ期）の混入品と考えられる。48～51は土師器の皿である。48は口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態である。口縁部上半がやや外反し、口縁端部は丸く収まる。49、50はいわゆる「て」字状口縁である。49は平底の状態に近い歪な底部で、口縁端部は内上方へ短く突起する。50は丸底の状態に近い歪な底部で、口縁端部は内上方へ突起させずに肥大した状態で収まる。51はいわゆるコースター形皿である。底部は円盤状を呈し、口縁部は底部周縁部から直接内上方へ折り曲げられる。52は瓦質土器の小瓶である。53は須恵器の鉢である。ハの字状の貼付高台で、体部下半は丸みを帯びる。時期は不明である。

築地基底部2100から出土した遺物は11世紀中頃～11世紀後半（京都Ⅳ期古～Ⅳ期中）に位置づけられる。

溝2101（第25図）

54、55は土師器の皿である。ともに体部上半から口縁部に二段ナデを施す。底部及び口縁部の器壁と比べ、体部の器壁が厚い。口縁部上半から端部は上方へ立ち上がり外反する。口縁端部は丸く収まる。

溝2101から出土した遺物は11世紀末～12世紀中頃（京都Ⅴ期古～中）に位置づけられる。

土坑2105（第25図）

56は土師器の皿である。体部上半から口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態である。口縁部上半がやや外反し、口縁端部は丸く収まる。57は瓦器の碗である。内外面全体にヘラミガキが施される。口縁端部は丸く収まり、内面には沈線が一条巡る。

土坑2105から出土した遺物は11世紀中頃～12世紀中頃（京都Ⅳ期中～京都Ⅴ期中）に位置づけられ、遺構の年代は切り合い関係から12世紀以降と考えられる。

第２面上包含層（第25図）

58は土師器の皿である。口縁部に二段ナデを施すが、上段部の凹みが不明瞭で、一段の状態に近い。口縁端部は丸く収まる。胎土は白色を呈する。59は白磁の碗である。低い逆台形の削り出し高台で、底部外面は露胎である。胎土は黒色粒子を含む白色で、体部の釉調はやや水色味を帯びた白色を呈する。北宋前半代のものと考えられる。60は白磁の碗である。体部は内湾気味に斜め上方に開き、口縁端部は折り曲げ、断面カマボコ状の玉縁を呈する。胎土は黒色粒子を含む白色である。61は軒平瓦の瓦当である。凹面に布目痕が残る。内区には退化した唐草文が描かれる。

第２面上包含層から出土した遺物は12世紀後半～13世紀初頃（京都Ⅴ期新～京都Ⅵ期古）に位置づけられる。

第25図　第２面　出土遺物実測図２（縮尺1/4）

第５章　自然科学分析

第１節　プラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡では、平安時代末期～鎌倉時代前期の包含層や、近世の可能性のある耕作土と推測される堆積層が検出されている。この遺跡周辺の古植生に関する手掛かりを得るために、プラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺のイネ科植物相について検討した。

２．分析試料及び方法

分析試料は、北壁土層から採取された６試料である（第５表）。２・７・８・12層が近世の可能性のある耕作土と推測されている堆積層で、22層と25層が平安時代末期～鎌倉時代前期の包含層と考えられている。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

第５表　分析試料一覧

試料No.	採取位置	層位	種類	時期	土相
1	北壁土層	2層	耕作土	近世	オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト
2		7層			黒褐色（2.5Y3/2）シルト
3		8層			黒褐色（2.5Y3/2）シルト
4		12層			オリーブ黒色（5Y3/2）シルト
5		22層	包含層	平安時代後期～鎌倉時代前期	砂礫混じり灰オリーブ色（5Y4/2）シルト
6		25層			砂礫混じり灰オリーブ色（5Y4/2）シルト

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第27図に載せた。

３．結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第６表）、分布図に示した（第26図）。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料１g当りの検出個数である。

６試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の８種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。この

第６表　試料1g当りのプラント・オパール個数

試料No.	層位	イネ	イネ穎破片	ネザサ節型	ササ属型	他のタケ亜科	ヨシ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	ポイント型珪酸体
		（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）	（個/ｇ）
1	2層	30,200	2,600	3,900	0	2,600	0	0	6,600	11,800	1,300
2	7層	27,500	5,200	3,900	2,600	2,600	0	0	11,800	7,900	2,600
3	8層	38,400	17,200	10,600	2,600	5,300	0	0	14,600	14,600	2,600
4	12層	62,400	11,500	3,800	1,300	6,400	0	1,300	19,100	24,200	3,800
5	22層	43,400	15,200	7,600	0	1,100	2,200	2,200	13,600	30,600	2,200
6	25層	64,700	15,900	9,100	1,100	0	1,100	2,300	23,900	36,300	3,400

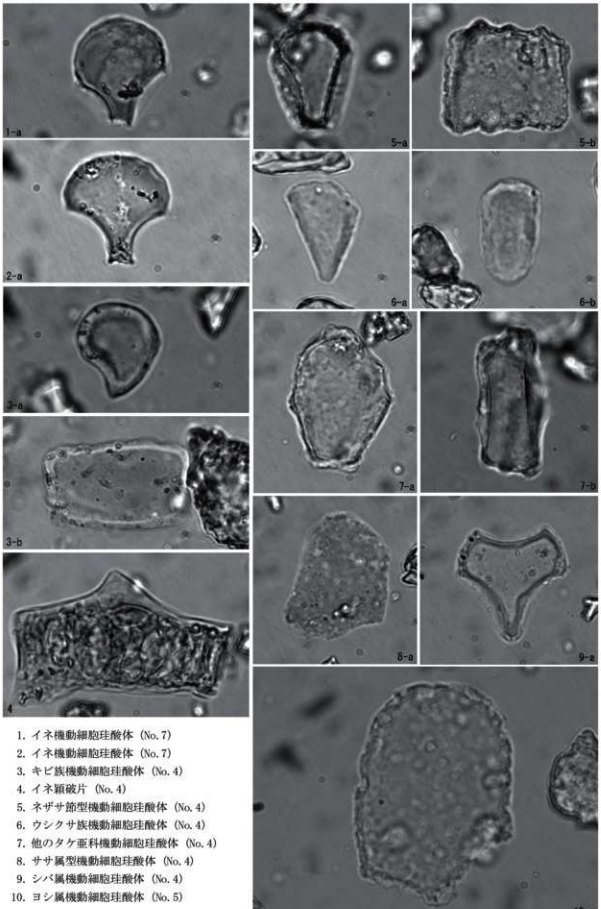
第 26 図　平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡における植物珪酸体分布図

うち、イネ機動細胞珪酸体の産出量が比較的多く、27,500～64,700個である。イネ機動細胞珪酸体は12層以下の層準で産出が多く、８層以上の層準では産出量が減少する。また、全ての試料においてイネの籾殻に形成されるイネ穎破片の産出も確認でき、産出傾向はイネ機動細胞珪酸体に似る。イネ機動細胞珪酸体に次いで産出量が目立つのがキビ族とウシクサ族の機動細胞珪酸体である。キビ族機動細胞珪酸体は6,600～23,900個、ウシクサ族機動細胞珪酸体は7,900～36,300個を示し、イネ機動細胞珪酸体と産出傾向が似る。

４．考察

平安時代末期～鎌倉時代前期の包含層とされる22層と25層では、イネ機動細胞珪酸体やイネ穎破片の産出が多い。包含層には何らかの目的で稲藁やイネの籾殻が混ぜられていた可能性がある。イネ機動細胞珪酸体に次いで多いのがキビ族とウシクサ族の機動細胞珪酸体で、試料採取地点周辺にキビ族やウシクサ族が生育していたと思われる。また、抽水植物のヨシ属の産出も見られ、試料採取地点周辺の湿地的環境の存在も示唆される。

近世の可能性のある耕作土と推測されている12層以上の層準でも、イネ機動細胞珪酸体やイネ穎破片の多量の産出が確認でき、キビ族機動細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体を伴っている。耕作土からイネ機動細胞珪酸体が産出する理由は、稲作を行っていた可能性や、堆肥や防寒など何らかの目的で稲藁が耕作土に用いられていた可能性などが考えられる。キビ族機動細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体については平安時代末期～鎌倉時代前期の包含層とそれほど顕著な相違が見られないため、近世においても遺跡周辺にキビ族やウシクサ族が生育していたと思われる。ただし、ヨシ属やササ属型、他のタケ亜科の機動細胞珪酸体については平安時代末期～鎌倉時代前期の包含層と近世の可能性のある耕作土と推測されている堆積層で産出が異なる。すなわち、平安時代末期～鎌倉時代前期の包含層ではヨシ属の産出が確認できたが、近世の12層以上の層準では産出していない。12層以上の層準では若干の乾燥化が進んでいたなど、ヨシ属の産出傾向は遺跡周辺の湿地的環境の変化を反映している可能性がある。あるいは、近世の可能性のある12層以上の層準ではササ属型機動細胞珪酸体や他のタケ亜科といったササ・タケ類の機動細胞珪酸体の産出が微増しており、試料採取地点周辺では平安時代末期～鎌倉時代前期よりも、以降の方がササ・タケ類の生育が良好であった可能性がある。なお、近世の可能性のある耕作土とされる層準のなかでも、２層と７層ではほとんどの分類群の産出量が減少する傾向がある。２層と７層は堆積速度が速く、珪酸体を取り込む時間が８層以下と比べて少なかったなど、堆積速度の影響を受けている可能性がある。



1. イネ機動細胞珪酸体（No.7）
2. イネ機動細胞珪酸体（No.7）
3. キビ族機動細胞珪酸体（No.4）
4. イネ穎破片（No.4）
5. ネザサ節型機動細胞珪酸体（No.4）
6. ウシクサ族機動細胞珪酸体（No.4）
7. 他のタケ亜科機動細胞珪酸体（No.4）
8. ササ属型機動細胞珪酸体（No.4）
9. シバ属機動細胞珪酸体（No.4）
10. ヨシ属機動細胞珪酸体（No.5）

a：断面　b：側面

第27図　平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡から産出した植物珪酸体

第２節　平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡出土木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。

２．試料と方法

試料は、井戸2013から出土した曲物側板1点である。発掘調査所見では、井戸2013は鎌倉時代以降の井戸跡と考えられている。試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行なった。

３．結果

同定の結果、曲物側板の樹種は針葉樹のスギであった。同定結果を第７表に示す。

第７表　樹種同定結果

試料No.	遺構No.	器種	樹種	木取り	時期
1	2013	曲物側板	スギ	柾目	鎌倉時代以降

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

（１）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　ヒノキ科　第28図　１a－１c(No.1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

４．考察

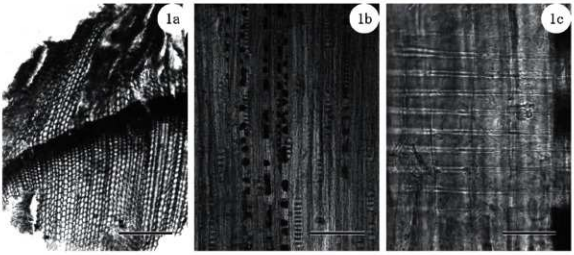
曲物側板の樹種は、スギであった。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持っており（伊東ほか，2011）、曲物の側板として選択的に利用されたと考えられる。

京都府では、京田辺市の宮ノ口遺跡から出土した鎌倉時代～室町時代頃の曲物側板３点が、いずれもヒノキと同定されており（伊東・山田編，2012）、今回の曲物側板の用材傾向は宮ノ口遺跡の例とは異なっている。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.



1a-1c. スギ (No.1)

a: 横断面（スケール =500 μm）、b: 接線断面（スケール =200 μm）、c: 放射断面（スケール =50 μm）

第 28 図　出土木製品の光学顕微鏡写真

第６章　まとめ

第１節　烏丸町遺跡～平安時代中期まで

当調査では、烏丸町遺跡に関連すると考えられる遺構検出できなかった。遺物については、古式土師器、古墳時代の杯身が出土している。

平安時代前期～中期に関連する遺構は、検出できなかった。わずかに京都Ⅱ～Ⅲと思われる土師器皿が出土している。

第２節　第Ⅰ期

当調査においては、概ね2時期の遺構、遺物を検出している。第Ⅰ期が平安時代後期～鎌倉時代前期ごろ、第Ⅱ期が鎌倉時代前期ごろ～室町時代前期ごろである。

第Ⅰ期とした時期に伴う遺構としては、築地基底部、溝状遺構、井戸、土坑、ピット等を検出した。

築地基底部2100は、初めに浅い溝を掘りその中を２～３回ほど土に砂利、小礫、土器片を混ぜて付き固めた状況が見られた。これは、築地塀を構築する際の掘り込み地業と考えられる（第20図参照）。なお、この築地基底部は1978年に行われた社会教育会館（現南図書館）において行われた調査では東洞院大路側溝として報告されている。この溝と今回の調査において検出した築地基底部の位置が連続する位置にあることや埋土の状況が類似していることから一連の遺構と考えられる。また、築地基底部の埋土を外したところ西一行北七門と北八門の境界から信濃小路北側築地推定線の間で２箇所の凸状の高まりや段差が生じる状況が見られた。西一行北七門と北八門の境界線延長上にあり、その南約７～８ｍの地点は、やや残存状況はよくないが段差が生じる状況が見られる。この状況は、1978年の調査においても西一行北五門と六門の境界線延長線上において同様と思われる段差が生じた状況が見られる。この結果からは、築地構築の際には一戸主単位で二か所の作業単位があった可能性も考えられる（第29図参照）。

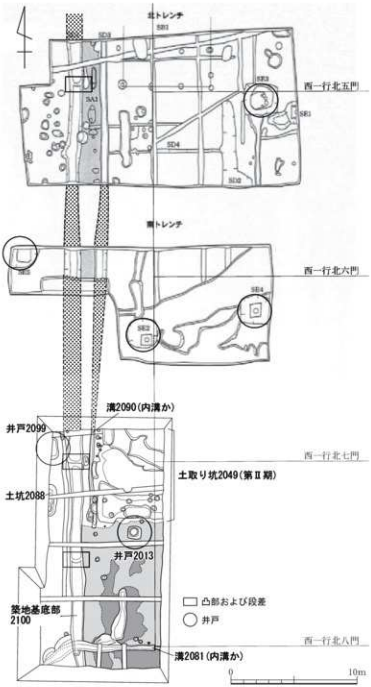
検出された築地基底部は、築地芯推定線より西に6.５mずれている。1984年に実施された調査において東洞院大路を挟んだ西側の左京九条三坊十四町、十五町において平安時代後期から鎌倉時代前期の烏丸小路東側側溝が検出された。この側溝は、推定線から２～５ｍ西側に位置しているという結果が報告されている。また、同調査において南側の調査では、側溝推定線から約3m東側に位置するという結果が報告されている。この調査結果から烏丸小路東側側溝は、信濃小路を境とし東西に大きくずらされて設置されたとしている。今回の調査においても築地推定線が西に大きくずれるという同様の結果であった。

築地基底部2100に関連すると思われる遺構として溝2090と溝2081がある。溝2090は、築地基底部2100との位置関係から内溝の可能性が考えられる。また。、溝2081は、信濃小路北側築地芯推定線上にあるが、小規模であることや埋土の状況にも類似点が見られない事から信濃小路北側築地の内溝と考えられる。なお、今回の調査においては、明確に宅地に関連する遺構は検出できなかった。

築地基底部2100より西側であり、本来は犬行あるいは路面と考えられる地点から井戸2099および土坑2088が検出されている。井戸2099は、掘り方のみの検出ではあるが井戸枠を確認することができた。出土遺物から平安時代後期と推定される。また、1987年の調査においても同時期と考えられる井戸が検出されている。井戸以外にも土坑、ピットが検出されている。これは、巷所との関連が考えられる。巷所は、道路を耕地化あるいは宅地化したものであり、右京域では、平安時代中期以降から始まり、鎌倉時代に入ると左京の八条大路以南でも巷所化が進んだとされる。今回検出された井戸や土坑は、このような巷所化の影響である可能性も考えられる。

第３節　第Ⅱ期

第Ⅱ期とした鎌倉時代前期ごろ～室町時代前期ごろの遺構については、土取り坑が挙げられる。土取り坑は調査区北東部の粘質土の分布する地点から検出されている。東西に約５ｍ、南北に約７ｍの範囲で北側および東側では、調査区外へ延びる。調査時は、これを整地層と捉えプラン確認、遺構掘削を行ったが、遺構とした土坑状の掘り込みは遺構としてみなすことはできなかった。そのため、すべての砂泥土を取り除くと底面は複数の段差を持っている状況がみられた。この段差は、概ね東西に主軸をもつが形状に規則性は無くまた、重複関係もつかむことはできなかった。粘土層のある地点おいてのみこれらの土坑が検出されたことから土取り坑と判断した。出土遺物は、平安時代後期～鎌倉時代前期ごろのものを中心としているが、その中に混じって鎌倉時代後期～室町時代前期ごろの遺物がみられた。このため鎌倉時代後期以降の遺構と考えられる。



第 29 図　昭和 53 年度調査と第Ⅰ期を中心として比較（縮尺 1/300）

第４節　結び

今回の調査の結果として、当該地は平安時代中期ごろまでは開発がなされることはなく開発が始まるのは早くとも平安時代後期ごろからと考えられる。周辺の調査等からも同様の結果がでており、平安京南東部でと都市的状況が見られるのは平安時代後期～鎌倉時代前期ごろまでとしたこれまでの結果とほぼ同様であった。都市的状況が失われる始める鎌倉時代前期ごろから巷所化が進み宅地としての利用もされなくなっていったと考えられる。この状況からは、第1面で検出した溝群は、鋤溝等の耕作に関連する遺構の可能性も考えられる。出土遺物については、耕作時に混入した可能性も考えられる。

平安時代後期～末ごろに宅地としての土地利用が始まり鎌倉時代前期ごろには廃絶したと考えられる。宅地廃絶と前後して耕地化進みさらには土取りなどが行われるようになり宅地としての機能は鎌倉時代後期には完全に失われていたと考えられる。

参考文献

山中章「古代都城の交通－交差点からみた条坊の機能」『考古学研究』三七－－ 1990

山中章『日本古代都城の研究』1997　柏書房

小森俊寛・上村憲章「平安京左京六条三坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1991　京都市埋蔵文化財研究所

小森俊寛・上村憲章「平安京左京九条三坊」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1987　京都市埋蔵文化財研究所

小檜山一良他「平安京左京九条三坊十町・烏丸町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2013-5』 2015　京都市埋蔵文化財研究所

堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1996　京都市埋蔵文化財研究所

仲村研「中世京都における巷所について－東寺領巷所を中心に－」社会科学 3（2・3），1968-09　同志社大学人文科学研究所

第８表　出土遺物観察表

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量(cm)			成形・調整		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
1	1006	土師器	皿	(15.0)	(2.6)	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄色　2.5Y7/3	
2	1006	山茶碗	小皿	8.1	1.6	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色　2.5Y7/1	
3	1011 1012	瓦質土器	鍋	(24.6)	(6.4)	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	外：灰色　N4/0 内：にぶい黄橙色 10YR7/2	
4	1011 1012	瓦質土器	鍋	－	(2.3)	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	外：灰色　5Y4/1 内：灰白色　5Y7/1	
5	1049	土師器	皿	(15.8)	2.3	(11.2)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4	
6	1049	土師器	羽釜	(25.8)	(5.5)	－	ナデ	ナデ	浅黄橙色　10YR8/3	
7	1087	土師器	皿	(18.0)	2.8	(12.8)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色　10YR8/3	
8	1087	青磁	壺	(9.0)	(2.9)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	オリーブ灰色 5GY6/1	施釉
9	1087 下層	土師器	甕	(22.8)	(2.4)	－	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色　2.5Y8/2	外面煤付着
10	1088 上層	瓦質土器	羽釜	(19.4)	(11.7)	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	灰色　N4/0	
11	1088 下層	瓦質土器	羽釜	18.8	13.5	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	外：にぶい黄橙色 10YR7/2 内：灰黄色 2.5Y6/2	外面煤・炭化物付着
12	1088	土師器	皿	10.2	1.6	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色　10YR8/3	
13	1088 下層	土師器	皿	(14.2)	2.4	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	
14	1088	土師器	皿	(13.0)	2.7	(8.0)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	
15	1088	白磁	碗	－	(3.5)	5.8	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色　2.5Y8/2	施釉
16	1089	白磁	碗	－	(3.8)	6.0	回転ヘラケズリ	ロクロナデ・回転ヘラケズリ・一方向のナデ	灰白色　2.5Y8/1	施釉
17	1091	土師器	皿	－	1.1	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	外：橙色　5YR7/6 内：浅黄橙色 7.5YR8/4	
18	1091	土師器	皿	－	(2.7)	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	橙色　7.5YR7/6	
19	1092	土師器	皿	(14.0)	(2.0)	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色　7.5YR8/4	
20	1092	瓦質土器	羽釜	－	(3.5)	－	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・ナデ	外：黄灰色 2.5Y5/1 内：灰白色 2.5Y7/1	外面煤付着
21	第1面上 包含層	土師器	皿	(10.0)	1.3	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	
22	第1面上 包含層	須恵器	甕	(20.6)	(7.4)	－	ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・ナデ	外：灰色　N6/0 内：灰白色 2.5Y7/1	
23	第1面上 包含層	瓦質土器	鍋	(21.8)	(3.2)	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ヨコハケ	外：灰色　N4/0 内：灰白色 2.5N8/1	
24	第1面上 包含層	土師器	皿	(9.0)	1.4	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色　10YR8/3	
25	2013	白色土器	皿	－	(2.1)	4.0	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色　5YR/1	
26	2013	白磁	碗	－	(3.1)	－	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色　5YR/1	
27	2047	白磁	碗	－	(3.1)	6.6	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色　2.5Y8/2	施釉
28	2048	瓦器	碗	(14.3)	4.8	(5.4)	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ・ヘラミガキ	灰色　N4/0	
29	2049	須恵器	鉢	(26.3)	(7.2)	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	灰色　N5/0	
30	2049	土師器	鍋	－	(3.7)	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	外面煤付着

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量(cm)			成形・調整		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
31	2049	瓦質土器	羽釜	(18.8)	(4.9)	－	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・指オサエ	灰色 N5/0	
32	2049	瓦質土器	鍋	(20.8)	(5.0)	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ヨコハケ	外：にぶい黄橙色 10YR7/3 内：灰黄色 2.5Y6/2	外面煤付着
33	2073	土師器	皿	9.6	1.9	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	
34	2081 下層	土師器	皿	(16.4)	3.0	(11.8)	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	外：浅黄橙色 10YR8/3 内：にぶい黄橙色 10YR7/2	内外面煤付着
35	2081	白磁	碗	－	(2.6)	5.8	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色 5Y8/2	施釉、底部墨書
36	2081 下層	山茶碗	碗	－	(3.3)	(7.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色 2.5Y7/1	
37	2081	土師器	皿	14.7	2.8	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色 10YR8/3	内外面煤付着
38	2081	瓦	軒丸瓦	高さ (6.0)	幅 (12.8)	厚さ 2.0	凸：型押し	凹：ナデ・指オサエ	凸：暗灰色 N3/0 凹：暗灰色 N3/0	
39	2090	瓦質土器	羽釜	－	(1.9)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色 N5/0	
40	2091	陶器	甕	(15.8)	(8.3)	－	ロクロナデ	指オサエ	外：褐色 7.5YR4/3 内：灰褐色 7.5YR4/2	
41	2094	須恵器	鉢	(27.4)	(5.4)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色 2.5Y7/1	内面煤付着
42	2095	瓦	平瓦	高さ (15.5)	幅 (12.6)	厚さ 2.6	凸：布目痕	凹：布目痕・ナデ	凸：灰色 N5/0 凹：灰色 N5/0	
43	2099	須恵器	鉢	－	(4.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	外：灰色 N6/0 内：灰色 N5/0	
44	2099	土師器	皿	－	(3.7)	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	灰白色 10YR8/2	
45	2099	土師器	皿	－	(3.1)	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	
46	2100	土師器	高台付皿	－	(3.1)	8.2	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 10YR8/4	全体に摩滅している
47	2100	土師器	底坏脚部	－	(11.5)	－	ヘラナデ・指オサエ	ヘラケズリ後ナデ	外：浅黄橙色 7.5YR8/3 内：灰白色 10YR8/2	
48	2100	土師器	皿	9.4	1.5	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	橙色 7.5YR7/6	
49	2100	土師器	皿	9.8	1.6	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色 10YR8/3	
50	2100	土師器	皿	10.6	1.7	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色 7.5YR8/4	
51	2100	土師器	皿	(10.2)	1.0	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色 7.5YR8/4	
52	2100	瓦質土器	小瓶	－	(7.4)	－	ナデ・指オサエ	ナデ	浅黄橙色 10YR8/3	
53	2100	須恵器	鉢	－	(4.3)	(7.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色 2.5Y7/1	
54	2101	土師器	皿	16.9	3.4	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	浅黄橙色 7.5YR8/4	
55	2101	土師器	皿	15.8	3.5	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4	
56	2105	土師器	皿	(18.0)	2.4	－	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	にぶい橙色 7.5Y7/4	
57	2105	瓦器	碗	(14.4)	(4.4)	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰色 N6/0	
58	第2面上包含層	土師器	皿	(11.2)	2.3	－	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	橙色 5Y7/6	
59	第2面上包含層	白磁	碗	－	(2.9)	(7.4)	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰白色 2.5Y8/1	施釉
60	第2面上包含層	白磁	碗	(16.6)	(4.9)	－	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	外：灰白色 2.5Y8/2 内：灰白色 5Y7/2	施釉
61	第2面上包含層	瓦	軒平瓦	高さ (5.2)	幅 (10.2)	厚さ 2.2	凸：ヘラケズリ・ナデ	凹：布目痕	凸：灰白色 2.5Y7.1 凹：灰色 N5/0	

写　真　図　版

第1面完掘（北から）

溝状遺構完掘状況（南から）

溝1088断面（南から）

溝 1088 遺物出土状況 1（南から）

溝 1088 遺物出土状況 2（南から）

土坑 1049 遺物出土状況（東から）

第2面完掘（北から）

築地基底部2100検出状況（北から）

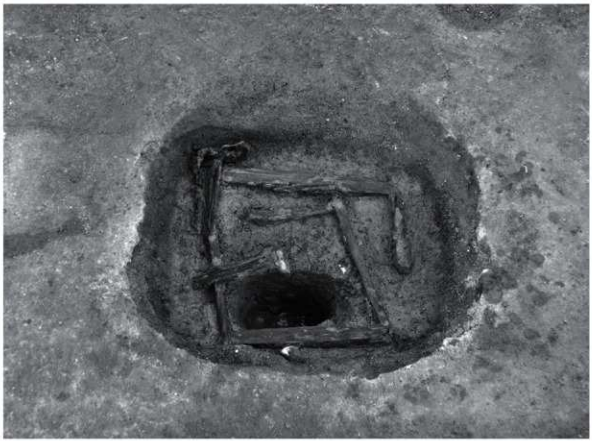
築地基底部2100断面（南から）

溝 2081 完掘（東から）

溝 2081 断面（東から）

土坑 2073 遺物出土状況（北から）

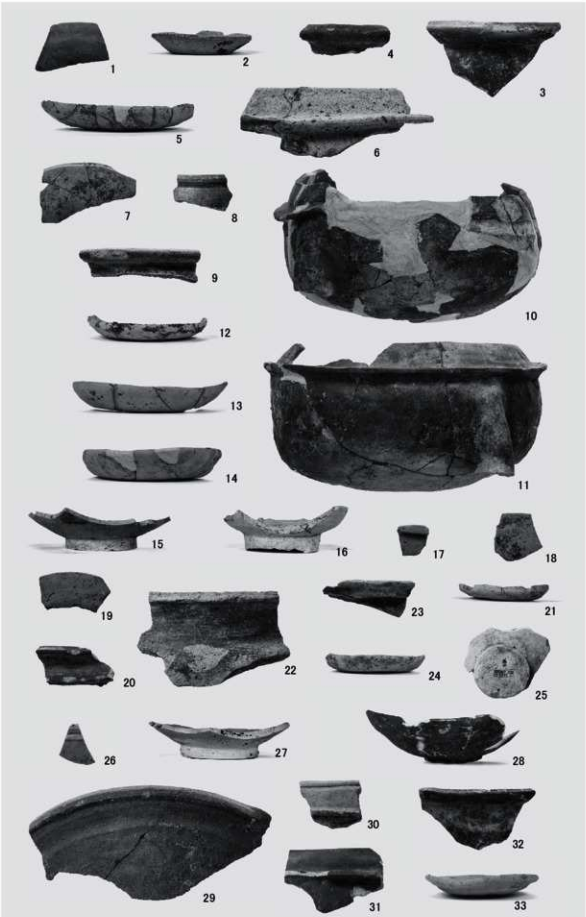
土坑 2088 断面（東から）



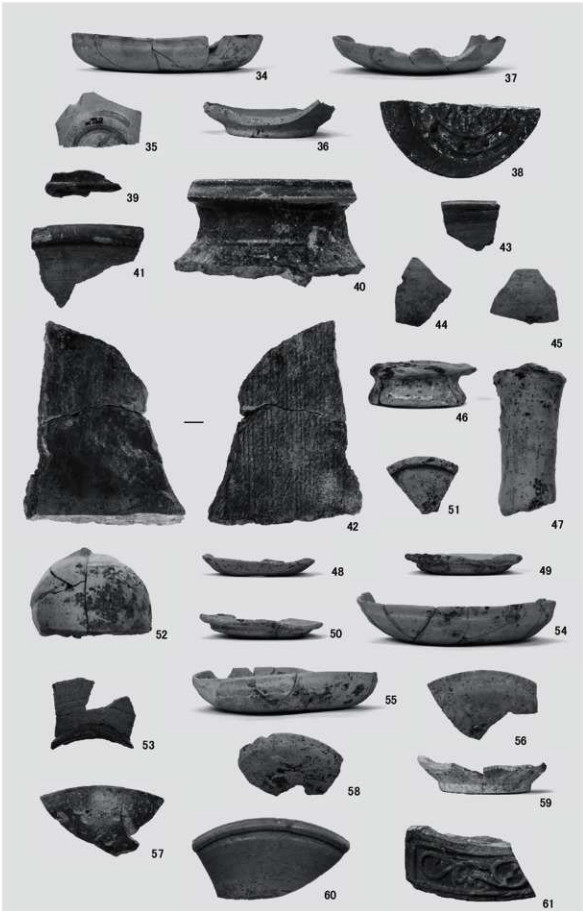
井戸 2013 横桟検出状況（南から）

井戸 2013 曲物検出状況（南から）

図版六


1
2
4
3
5
6
7
8
9
10
12
13
11
14
15
16
17
18
19
23
21
22
20
24
25
26
27
28
30
32
29
31
33

出土遺物 1


34
37
35
36
38
39
43
41
40
44
45
46
42
51
47
48
49
52
50
54
55
53
56
58
59
57
60
61

出土遺物２

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょうさきょうくじょうしぼうさんちょうあと・からすまちょういせき
書　　名	平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡
副 書 名	東九条南山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第 17 輯
編 著 者 名	熊谷洋一　濵村友美
編 集 機 関	株式会社イビソク関西支店
所　在　地	〒612-8425　京都府京都市伏見区竹田田中殿町 86 番地　TEL 075-632-8109
発 行 年 月 日	2017 年 10 月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条南山王町5番1	26107	1・759	34°58′51″	135°45′40″	20170227～20170421	252 ㎡	ホテル新築工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡	都城跡 集落跡	平安時代後期～鎌倉時代前期	溝状遺構、築地基底部、井戸、土坑、ピット	土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器、瓦質土器、瓦、木製品	
		鎌倉時代前期～室町時代前期	溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、瓦、山茶碗、白色土器	

要　約	平安時代後期～鎌倉時代前期（第Ⅰ期）および鎌倉時代前期～室町時代前期（第Ⅱ期）の２時期の遺構を検出した。 第Ⅰ期では、東洞院大路東側築地基底部や信濃小路北側築地内溝と思われる溝等を検出した。この他には井戸、土坑、ピットを検出した。 第Ⅱ期では、複数の溝、鎌倉時代後期～室町時代前期と思われる土取り坑を検出した。

平安京左京九条四坊三町跡・烏丸町遺跡
—東九条南山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日　2017 年 10 月

編　集
発　行　株式会社イビソク関西支店

住　所　京都府京都市伏見区竹田田中殿町 86 番地
〒 612-8425　TEL 075-632-8109

印　刷　冨士出版印刷株式会社